

▲宮中よりの幣帛入り櫃の前に坐して、祝詞奏上の儀

役員も若返りが必要」と会長職を振って来られた。お聞きすると、前々会長の岡部忠夫氏は八十二歳とのこと。「困った。参った」。

役員選考委員会からお話があつて気を付けてみると、一生懸命に史談会の活動をされている同年輩の方々が何人も居ら



会長就任の挨拶に代えて

小野意雄

ご奉仕の新しい生命を戴いて

小田原史談

第 194 号
 発行所 小田原史談会
 小田原市栄町2-13-20
 アオキ画廊内TEL(24)0637

れる。当然のこととお断りする
 と、会歴の長さ・古さを挙げら
 れる。とやかくありましたが、
 選任された上は、なんとかご奉
 仕させていただきます。

私が会長としてなすべきこと
 は、一に後進たちに道をつける
 こと。二に史談会の名声と信望
 と存在感を高めて、五十周年を
 賑々しく迎える準備。三、合わ
 せて新入会員の増大。四に組織
 的にして分り易い協働の会活動
 にすることかと思っています。

事業活動の一つとして起こし
 た語り部の会。活動準備に日時
 を要しますが、まちな人々ひと
 り一人を語り部として「小田原
 はどういうまち・街」なのかを
 聞き取り、まちを再発見しつづ
 若い人たち、孫たちに伝え、ま
 ちづくりに活かせればと思う。

昨年十月下旬に高野山(会報
 第192号に寄稿)に行つて来ま
 した。六十六歳で隠退声明し、
 自分に還り、身の回りを整理し、
 古希を過ぎ、高野山で幼児期か
 らの懸案を済ませてから、七十
 二歳を迎える予定でした。言う
 なれば「年貢収め・・・」と
 思っていました。年が明けて「高
 野山だけでは片手落ちではない
 か」という声が娘たちから出て
 来て「では、どこへ行く。伊勢
 へ」ということになった。

二月十七日は祈年祭。勅使も

お見えになる。どうぞ、お越し
 になりませんか」という次第に
 相成り、お伊勢参りをした。

これが大変なことだった。伊
 勢神宮百二十五社のうち、式年
 遷宮をする十六社すべてを、神
 職のご案内で参詣させて戴い
 た。故殿地に入れて戴いての心
 の御柱参拝。豊受大神宮御饌殿
 での日別朝夕大御饌祭の奉拝、
 十年後の式年遷宮のための作業
 に掛かっている山田工作場の見
 学、神馬休養所見学等々・・・

「神々と自然が共にある空間」
 「日本の文化、生活の原風景」
 「神宮の存在、そのことの意義
 を再発見」式年遷宮をめぐる自
 給システムと一般家庭の神棚に
 まで及ぶ六十年を超える再生と
 循環のシステムの継承・・・

前後して、「(仮称)総合計画市
 民提言書作成委員会設立準備
 会」が発足、メンバーとして加
 わることになった。そして史談
 会会長のこと、関東都市学会監
 査役再任、鎌倉へ、・・・

伊勢神宮で、新しい生命を戴
 いて来てしまったようだ。この
 いわゆる余生の生命は、ご奉仕
 のための恩恵かも知れないと思
 い込むことにした。還暦から数
 えて、考えてみれば、七十二歳
 は十二歳。加冠・元服の歳。若
 年者です。よろしくご指導、ご
 鞭撻のほど、御願いたします。

文命西堤の謎を追う(その一)

内田 清

はじめに

文命西堤すなわち岩流瀬土手は、酒匂川治水の要であった。酒匂川で最も欠壊回数が多いこの堤には、文命社が祀られ、波乱の歴史があった。したがって様々な謎を秘めている。

以下の項目で述べさせて戴く。

- 1、石灯笼は文命西堤宮だった
- 2、可笑しな『風土記稿』の絵
- 3、裏返しされた西堤碑を読む
- 4、案内板の内容は不足ではないか
- 5、手洗い鉢の語るもの
- 6、子育て地藏尊なのか
- 7、西堤の工事は誰が行なったのか
- 8、災いを福に転じた人びと
- 9、桜堤より桃・梨堤に

三、年代享保十一年丙午歳四月

(二七三)

左側 官祭 田中丘隅欽五

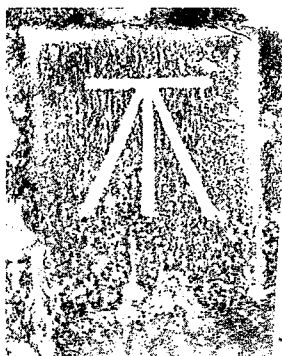
私は写真を見て「灯笼ではないぞ」と思った。蓋がしてあるので灯火が見えないからである。銘文にもおかしなところがある。出掛けて確認した。蓋の中央に「宮」の銘があり、上の二文字が欠損している。蓋と笠の間に「水土大禹神祠」の銘も読めた。これで欠損文字は「文命」と推測して「新編相模風土記稿」(以下『風土記稿』と略称)で川村岸の項を覧ると「水土大禹神文命宮」だった。《祠》は落ちていたが、この石塔は「文命宮」の「祠」だったのである。

また銘文でも誤読や落ちが四字あった。先ず「歳四月」が「夏四月」、陰暦では立夏から立秋まで、四月から六月が夏だったから誤読である。次に「官祭」や「風土記稿」の「奉官命」は「承・官命」だったから、「官(幕府)の命をうけたまり」と読むのが正しい。更に「欽五」は「欽立・つつしんで立てる」だった。

要するに文命西堤宮を灯笼と見誤り、銘文についても見落しや誤読を重ねた初心者による欠陥調査報告だったのであるが、宮選報告書でも、此の手の物があるので留意したい。



▲西堤碑と文命宮

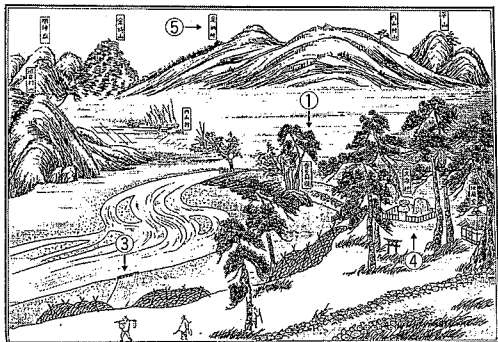


▲明治水準点標識
縦 7.1cm / 横 6.7cm

なおこの石塔の台座正面矢印の所に写真のような極印がある。これは明治九年(二八三)に制定のイギリス式地図製作のための水準点標識の名残で、非常に珍しい(明治水準点の会)。

2、可笑しな『風土記稿』の絵
『風土記稿』には適宜挿し絵があつて理解を援てくれるが、写真と違って写真性には以下のように問題点を内包している。掲載の「文命西堤図」は「雄山閣本」のもので、二頁立の「公文書館本」とは僅かにずれがあるが、以下の論点については差がないので利用させて頂く。

① 中央左の松の所に「春日森堤」の表示があるが、この堤は「文命社」の対岸(現南足柄市春日山莊裏)にあつて洪水流を「文命社」の北の河岸段丘に当てて、「文命西堤」に当たらないようにする為の堤であるのに、「文命社」続きに描かれているので決定的な間違いだ。



▲文命西堤図

② 「文命社」が左に「宮」右に「碑」と現状と逆であるのも

疑問。

③ 「文命社」北の穴水門で近年まで取水していた原耕地堰(松田用水)が、堰の左手前から堤中へ用水を取り入れているのも疑問。(現在は内山発電所排水をサイホンで導水。)

④ あるべき筈の手洗鉢がなく、鳥居がある。現在は松が一本も失くなり银杏などになってる。

⑤ 酒匂川本流が西南へ寄りすぎていないか。金時山や内山村の位置は良いが、矢倉岳の陰で見えない筈の足柄峠が描かれている。明神岳はもつと左(南)に挿し絵をそのまま受け容れず、問題点解明の努力をする過程で歴史が見えてくるだろう。

3、裏返しされた西堤碑を読む
現在は文命西堤宮の左手の碑が西堤碑である。先ず銘文を確認してみよう。

文命函隈碑(右横書き)

故岩流瀬堤・大口堤。今改名曰「文命」堤。^{丘隅}欽銜^二官命^一来修之肇建^三神禹祠^一。因以名^二之。事詳^三東碑^一。其賜^一官庫金^二十兩。其華栽^三桃^一季^一。其果植^二梨栗^一。以為^三歲時祭祠之資^二也。乃今日。百爾子弟搏^レ土運^レ石。歲以為^レ例。補^二罅漏^一而賽^レ神。勉^レ施勿^レ怠。遂勒^レ石謹告^二諸千歲^一。

享保十一年丙午夏五月二十五日

武蔵国川崎田中丘隅立

(裏面) 東都徂来先生・奉

教刪潤門人平義質書

(七行にわたって削られている)

石工 岩村 七兵衛

国立公文書館蔵の『風土記稿』

には、「返り点や」が「ついで」だったので、これにより読み下すと次のようになる。ただし()内の文字は読み仮名と語意、《 》の文字は拓本により内田が加筆・修正したもの。

故(もとの)岩流瀬《堤》・大口堤は、今改名して文命堤と日(いう)。丘隅は欽(つつしんで)官命を銜(うけ)来りて之れを修め、肇(はじめ)て神禹の祠を建つ。因つて以つて、之を名づくる事は、東碑(東堤碑)に詳(くわしい)。其賜うは官庫金二十兩。其れ華は桃・季(すもも)を栽(うえ)。其れ果は梨・栗を植る。以つて歳時・祭祠(さいし・祭典)《之》資(もとで)と為す也。乃(すなわち)令して日百爾(ひやくじ・あらゆる)子弟は、土を搏(うち)、石を運(はこぶ)を、歳(さい・年々)以つて例と為せ。罅漏(かろう・欠け)もれるを補い、而して神を賽(さい・お礼参り)するは、施(これ)を勉め怠る勿れ。遂(つい)に石に勤(きざみ)、謹(つつしん

で)諸(これ)を千歳(せんざい・千年)に告ぐ。

享保十一年丙午夏五月二十五日

武蔵国川崎田中丘隅立

(裏面) 東都徂来先生・奉(うけたまわり)

教刪潤門人平義質書

(題字三字と七行が削られている)

石工 岩村 七兵衛

碑文の要点は次のように読み取れる。

① 岩流瀬・大口両堤を今文命堤と改名した。

② 丘隅が幕命で文命堤を修築し文命宮を建てた。

③ 官庫金二十兩と、桃季・梨栗を植えて祭典の資と為せ。

④ 子弟は土石を運び、堤の補修を年々の例と為せ。

⑤ 神(文命宮)の祭典を怠るな。

⑥ 是を碑にして永く人びとに伝達する。

⑦ 碑は一七二六年五月二十五日に川崎の田中丘隅が立てた。

⑧ 「東都(江戸)の荻生徂来先生が將軍(八代吉宗)の命を奉(うけたまわり)刪潤(さんじゅん・添削)して門人平義質(三浦竹溪)に書か教(し)む」と彫られている。

続いて七行にわたって文字が削られていることの意味が問題である。

荻生徂来の添削に触れない所

論は論外だが、削字を摩滅としている論者も調査未熟であろう。

この謎については、友人故瀬戸長治が「文命堤碑を考える」(市史研究あしがら第6号)で、次のように書いている。

文命東堤の「後碑と西堤碑は共に享保十一年四月にできていたが、「官庫金の下賜」が決定したことから碑文を書き替える必要が生じてきた。その時後碑は新しい碑石に刻まれたが、西堤碑は同じ碑石の碑文を削って裏返しにし、新しい表面に(五月二十五日付けの)碑文が刻み込まれたのであろう。」

類似碑との対比で西堤碑の特色を明示された瀬戸氏は流石である。

同様に西堤碑銘文を文命東堤の前碑(五月建立)に比べると、(あ)文章が約五分の一と短い。

(い)文命堤の由緒は殆ど東堤碑に譲っている。(う)官庫金も五分の一の二十兩と少ない。

(え)平義質書は、字(あざな)の子彬を省略している。

同様に文命東堤の後碑(四月建立)に比べると、(a)約四分の一の短文。(b)官庫金が記載された。(c)桃季・梨栗を植えることが記載された。等々の相違点が挙げられる。なお(c)の事項については8節で再考させて頂く。(4節以下次号へつづく)

小田原の郷土史再発見 日本最古の水道「早川上水」を歩く

石井 啓文 ひろ ふみ

板橋は、天正十八年の大久保忠世の小田原入府に伴い、大窪村を板橋村に改めたことが寛文十二年(一七二二)の板橋村明細帳に記されている。ただ、太田道灌の「平安紀行」に板橋の名が見え(初見、板橋↓大窪↓板橋)となつたと言われている。

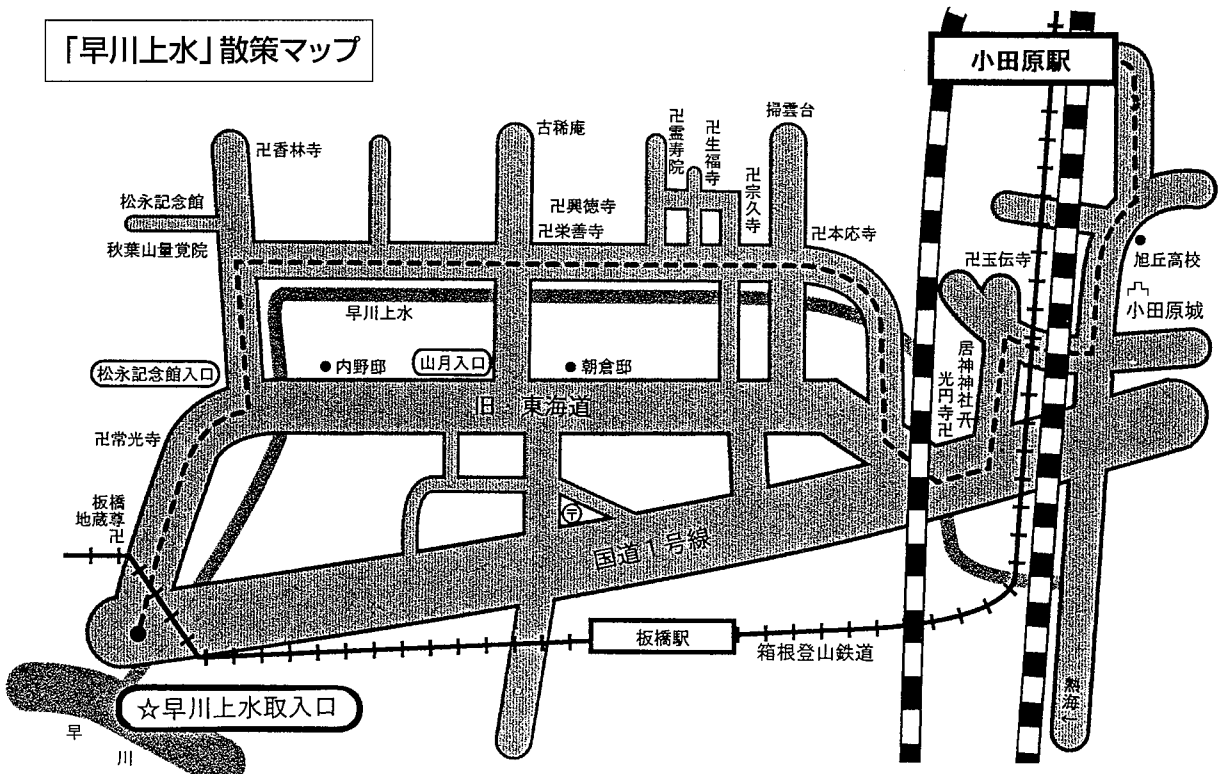
しかし、「平安紀行」の作者太田道灌は疑問視されている。小田原北条時代の文書には板橋の地名は全く見られず、それ以前の板橋は「平安紀行」のみである。同書冒頭の文明十二年(一四六〇)に間違いはないだろうか? 同書を江戸時代の作品と発表できれば、画期的な足跡を残すことになるのだが。

戊辰戦争で小田原と似た経過を辿った新潟県長岡市は、第二次大戦の空襲も受け、史跡は少ないと言われている。そこで「見る観光から考える観光を」と、郷土史家でもある稲川同市立図書館長は言われ、「単なる史跡巡りではなく、歴史やそれを題材にした文学を通じて、イメージを膨らませていく。そのために、

中央で聞けない話、想像をかき立てるようなエピソードを訪れた人に提供していきたい」とも云われている。長洲元神奈川県知事と小泉総理の言われた「米百俵」の町である。そんな話を頭の片隅に、青空の下、板橋の「早川上水」を歩いた。

小田原駅東口から、小田原城方面に八小堂書店前のお城通りを直進すると旭丘高校に突き当たる。右折すると、小田原城入口を経て城山隧道と青橋との二又路に至る。東海道線沿いの城山隧道に向つて、左手に小田原城の樹蒼を仰ぎ見ながら進み、隧道を出れば正面が国道一号线と早川方面熱海道の交差点である。その手前に歩行者用の信号があり、そこを横断すると東海道線のガードを潜り、右手に旅の常備薬「ういろう」で知られる外郎家の祖宇野藤右衛門定治が開基した玉伝寺、その先を辿れば北原白秋が寺内に「木兎の家」を建てて住んだ伝肇寺である。左折して国道一号线に出る。箱根方面と熱海・伊豆方面へ

「早川上水」散策マップ



作図 長田恵子

分岐する最も交通量の多いところである。そこを板橋方面に右折すると「御組長屋」とある旧町名石碑が目に入る。板橋(上方)口の足軽長屋のあった所である。ここに住む足軽が、早川上水を巡視していたのであろう。

その先が居神社社である。正面の石段を登った中段踊り場左手に水神が祀られている。東海道分間延絵図も明確に記している。先の伝肇寺文書には「井神の森」とあり、その由縁が窺える。更に石段を登れば境内に鎌倉時代末期の念仏供養碑の古墳群がある。小田原市指定重要文化財である。

参拝を終えて国道に戻ると隣が光円寺である。春日局の再建と伝えられ、ご住職は代々春日姓であるという。

同寺の角が「板橋見附」。現在は国道と旧東海道の分岐で、右に旧道をとって新幹線のガードを潜り、右折してガード沿いに小坂を登ると小川に出る。

目的の「早川上水」である。

小橋を渡ると正面が県立小田原職業技術校で、右にガード下を上水沿いに進めば、先ほどの光円寺墓地越しに同寺本堂が聳えている。上水は墓地の石壁に突き当たり、右折して小家屋の下を地下に吸い込まれて行く。

僅かな距離であるが国道の騒

音は静かになり、小川のせせらぎが耳に心地よく響いてくる。

ここから居神社社前に出て、東海道の真ん中を流れ、城下住民のための飲料水として供給されていたのである。現在はお堀に給水されている。

暫し、せせらぎに耳を傾けたあと、上水を遡ることにする。

先ほどの小橋の下を覗けば、分水して一流が地下に吸い込まれ旧道と国道を潜って行く様子が窺える。小川を左にして小道を辿ると、右手に本応寺を見て一際広い坂道を横断する。坂道を上れば茶人・実業家で知られる益田孝が明治末年より過した掃雲台に通じている。更に上水沿いの小道を辿れば、右手に宗久寺・生福寺・靈寿院・興徳寺・栄善寺と、さながら寺町通りの観である。

水路の側壁に洗い場用のス Teppuraしきものが刻まれている。洗濯や野菜洗いをするため場所とわかるがセメント造りであり、大正末から戦後までの間に使われたものと推定できる。地方の用水路に見られる洗い場風景が、この早川上水でも同様に行われていたと推定する人もいるが、どうであろうか?

福井市の芝原上水では、法令に反した者は過料銀を徴収されたという。同地の「過料覚」に

よれば、芋や小鯉を洗っただけで銀五匁、同三匁、最高は洗濯をして銀二十匁を徴収されている(国史大辞典)。

早川上水も絶えず足軽が見廻っており、水門の管理は板橋村の担当であった。板橋口から水門まで五百^ト程だろうか?

本町の御用留に水路係への音物はしないという請書がある。ということはお目こぼしを願って住民が進物を届けることがあったとも考えられる。当地に

過料等の史料は見られないが、江戸時代の見廻りはかなり厳しく実施され、洗濯等は禁止されていたのではないかと考える。

やがて、T字路に直面すると小川は直角に左折し、道を右折すれば毎年十二月六日の火伏祭りで見られる秋葉山量覚院を左に見て、松永記念館と香林寺への道である。左折して上水を辿れば旧東海道に出る。延絵図に板橋村西方、板の橋が描かれている所で、「松永記念館入口」の木柱が建っている。

上水は旧道を潜ると行く手は民家に阻まれる。右折して旧道を辿れば板橋地藏尊を右に見て、左には昭和初期の出格子窓付きのどっしりした建物の植村邸がある。植村邸の先、地藏尊の正門石段の斜向かいの民家の路地坂を少し下れば上水に出

る。右上流は民家の間を流れ辿ることはできないが、その先で国道を横断している様子が窺える。

小橋を渡り左に水路沿いに下ると、小川越しに「ホタルの里」の看板が目に入る。水は蕩々として流れ、目をつむれば四百五十有余年彼方が浮かぶが、民家の庭に無断で入っているよう落ちて着かない。

ホタルの里

この地域は、ホタルを養殖し放虫している水路です。水をきれいにし、ホタルを可愛がりましょう。

小田原ホタルをふやそう会

地藏尊前の旧道に戻り、先へ進むと国道一号线に出る。「お塔坂下」と呼ばれ、上を箱根登山鉄道の鉄橋が跨いでいる。信号を待つて小田原方面へ十^ト程戻れば説明板。「小田原用水取水口」とある。かつて、「早川上水としなければ」という意見があり、両者を勘案した文章になったという。

横断歩道の五・六^ト先に駐車場スペースがあり、釣り客であろう数台が駐車している。取水口に降りられる階段が設けられ、河川敷へ降りられる。水門の前はゆったりとした水

が湛えられ水門に流れ込み、余水は水量調節の堰板を越えて、五・六十^{メートル}先で本瀬に戻って行く。上手を見れば同じく五・六十^{メートル}位先が本瀬との分岐点で高い方に水が流れている錯覚を覚える。近づいて見れば、本瀬との分水が分かる。高い方に流れているのは錯覚ではない。巧みに水位を上げ自然に高い所に流れるよう石組してある。振り返れば水門の辺りは二^{メートル}近い高低差ができています。昔から、こうした方法だったのだろうか？

改めて人間の知恵の素晴らしさを教えられる。

暫し、早川のせせらぎに耳を傾け、湯本の三枚橋から近くに迫る箱根の山に目を遊ばせる。水門に戻り階段を登って、改めて水門を通った清流を覗くと三、四^{メートル}程深い所を流れている。水路沿いから国道へ出て、旧道に戻ることにする。

地藏尊前を通り、板橋が架けられていた「松永記念館入口」木柱の所で考えた。

何故、ここから道の中に板橋口まで水路を造らなかつたのだろうか？ 府内のみ道の中を通し、何故板橋村は道路を避けたのだろうか？ 北条二代氏綱時代、板橋村の人家はどのくらいだったのだろうか？ 旧道沿いにある紺屋津田藤兵衛は、大森氏

の頃には存在していたと言われ、石屋善左衛門は北条氏の招きでこの地へ居を構えたと伝えられている。板橋村明細帳には「呑水は川水を用いる」とある。同村民は早川の水を使用したことが窺える。とすると、山側を通したのは府内に流すために、高さを保つためだったのではないか？ 昔とは違うだろうか、思った以上に清流に勢いがある。

旧道を小田原方面へ進むと、左に一際目立つ建物が目に入る。明治三十五年建築の元醬油醸造の内野邸である。この辺り、一月八月の地藏尊縁日には両側いっぱい露店が並び、江戸時代は相模国随一の参拝者であったことが紀行文等に記されている。今も、その賑わいは伝えられている。

更に進むと、実業家大倉喜八郎が大正九年に建てた「山月」入口の看板がある。この道を行けば、山県有朋が明治四十年に建てた「古稀庵」と「皆春荘」に通じる。次いで、昭和初期のバルコニー付き洋風建築の朝倉邸を左に見て進むと、紺屋津田藤兵衛家では蔵が開放され見学できる。そして、二^{メートル}余の石灯籠が置かれた青木石材店がある。祖は石屋善左衛門で家康にも仕えた。昨年十月、「こゆるぎ座」の公演では、稲葉氏がこ

の善左衛門家を避けるために用水を山側に通すという脚本であったが、出鱈目である。善左衛門の居住と、上水の敷設は殆ど同時期だったのではないだろうか？

そして、スタート地点の光円寺のある板橋見附に出る。天正十八年七月、小田原合戦が終結すると、秀吉は石垣山を下り、ここから小田原に入ったのである。今井にいた家康は江戸(山王)口から入り、ともに東海道の真ん中を流れる「早川上水」を目にしたのである。家康は、この時、江戸の水道調査を命じ、僅か三ヶ月で小石川上水を敷設し後の神田上水の基を作ったのである。その後、寛永期までに各大名が敷設した水道・用水は十六を数え、早川上水を参考にしたことが知れる。

旧道と国道との分岐点にある三本コーヒー店前で国道を渡る。南側道路下を小川が国道下から流れ出ている。最初に見た小橋下でお堀への流れと分岐した早川に戻る水路である。この小川に板橋村東側の板橋が架けられていたのである。

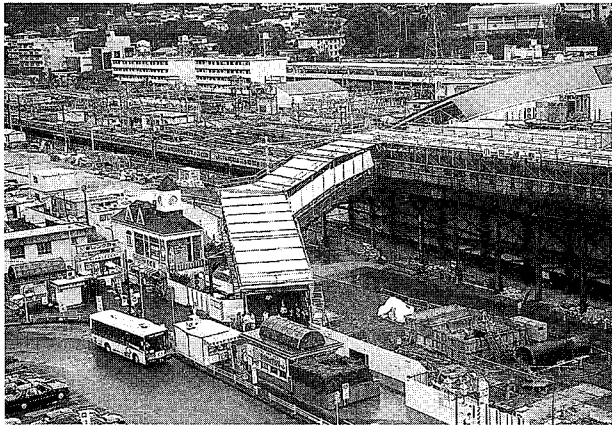
数^{メートル}程先の箱根方面、ジュエリーシマノ手前に南に入る路地があり、これを辿ると水路に沿って十^{メートル}程で広い道に出る。ここで水路は暗渠・側溝となる。

道なりに進めば鳶の垂れ下がる小さな隧道が二つある。紅葉した鳶に風情がある。上の線路は手前が箱根登山鉄道、向こう側が東海道線である。近くで車を洗っている青年に、「隧道に名前があるかを尋ねるが「ない」という。「鳶隧道？ 双子隧道？」鳶の名前(種類)の知識がない。

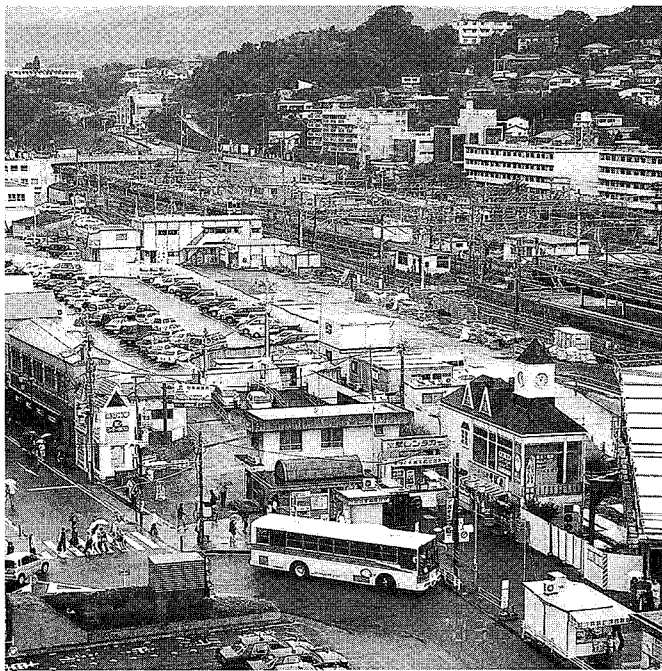
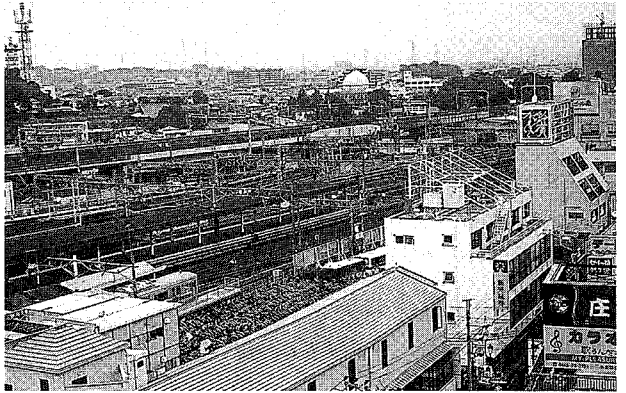
そこを出た所が熱海道。水路は熱海道沿いの側溝になる。この先で早川に戻っているのである。前方右手斜向かいに国史跡「小田原城早川口遺構」入口の木柱が立っている。道路を横断し「遺構」を見学するのもよい。小田原合戦時に造られた総構跡である。遺構に沿って側溝があり、これを辿ればやがて開渠となり大蓮寺前で海に注いでいるが、東海道分間延絵図には描かれておらず、昔からのものではないのだろうか。

熱海道を左に五十^{メートル}程行くと国道一号線と小田原駅方面への交差点。そこを左に東海道線ガードを板橋方面へ戻れば、小田原城主大久保家の菩提寺・大久寺である。国道を横断し、小田原駅方面に最初に渡った信号の所を右折すれば、閑静な住宅地を経て、御感の藤のあるお茶壺橋から小田原城に行ける。

(おわり)



▼東京方面をみる

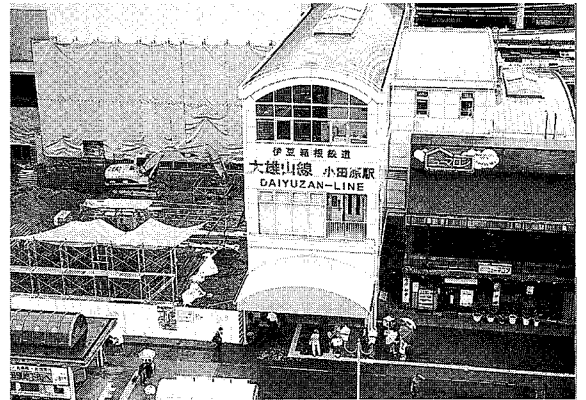


▲箱根山方面をみる ▼東京方面をみる

改造中の小田原駅

15.6.18

市民に親しまれてきた旧小田原駅舎は既になく、更地になっていました。新駅舎に装う最中を、箱根登山ビルの屋上から撮りました。この景観も変わってゆきますので、合間の姿を望見しました。



酒匂史談 ⑭

川瀬速雄

2 上輩寺。酒匂四四一三五番地。

時宗。九品山浄土院上輩寺。

時宗、上輩寺、(国府津村蓮台寺末、開山他阿眞教、(永仁五年(二九七)建)他阿上人(元応元年(三三二)正月二十七日卒)同時に、中輩、下輩の両寺も村内に起立す。(下輩寺は今廢し、本尊薬師は即当寺に安ず。村東神明社後の陸田に薬師術と云ふ字あり、是其蹟なりと云ふ)。

『新編相模風土記稿』本尊阿弥陀仏。開山他阿上人像は小田原高梨町の仏師宮田氏の作。体内に「納入銘札」あり。

「開基は酒匂右馬頭某。寺開基大檀那酒匂右馬頭阿弥の位牌を置く。背に維正安元年(二五七)七月七日往生とあり、木理の様は全く当時の物である。長一尺六分、巾二寸五分。

イチョウの樹の下に酒匂右馬頭の墓と云い伝え

られている三基の五輪塔が並んで建っている。高さ各五尺四寸。又、上輩寺の西道路を隔てた田中屋(石塚家)の駐車場に五輪の小塔が二基ある。右馬頭の従者(馬丁)の墓といわれている。

天保(安政(二八三)一八五二、寺子屋の師匠をしていた妙恵尼僧の「男女筆子中」の筆塚があり、二宮金次郎の門弟酒井儀左衛門(明治十七年(二八四)卒)の墓もある。

境内に小田原市の天然記念物に指定されている樹齢約九〇〇年、樹高二十八米、株囲九米、百個程の乳下ある、大乳イチョウがある。

半鐘あり。二十七世檀阿賢超和尚代。宝歴六年(二五七)丙子天八月吉日、小田原鑄山田次良左衛門薩原孝次作。檀徒川瀬・山崎・山田・酒井等が寄進。

江戸末期(明治中期(一八五〇)一八七三)三十四世桜沢堂山和尚(明治四十年(二九

三月二十日卒)は絵画(山水画)をよくし、檀家に絵を与えた。私宅にも一幅ある。寺伝によると、堂山和尚は江戸の人、粹人で、浅草の芝居小屋に出入りし、頼まれれば脚本など書いて与えたという。沼津に赴くために国府津唐沢より船に乗ったが、寝ている間に泥棒にあつて着の身着のままの無一文になり、仕方がないので引き返し、山西の光幡寺に投宿していたが、上輩寺が無住職となつたので上輩寺の住職におさまつたという。

現在酒匂には寺院が十寺あるが、山門のあるのは上輩寺、大見寺、法船寺の三寺だけで、いずれも素朴な門である。上輩寺の山門は元南蔵寺の山門であつたが、明治三十五年(二〇三)の大海嘯で南蔵寺は堂宇が流失し、山門は無事に残つた。翌々

年南蔵寺は現在地に再建され、山門を解体移設しようとしたが、山門の木組が精巧で解体困難、無理に解体したら復元できないというので、国道を隔てわずか二町程の距離を、建つたまま引越すことにした。しかし上輩寺の前で道が鉤の手に曲がっているため立ち往生、南蔵寺と上輩寺の住職、世話人が話し合いの上、山門を上輩寺で買い取ることになった。この山門は江戸中期(おそらく元禄大地震後と思う)の建物で、建築中に旅の工匠が通りかかり、手間賃稼ぎに手伝つて行つた。その工匠が左甚五郎だと言ひ伝えられていたが、真偽の程はとに角、見た目にはわからないが特殊な組立の門のようである。これは、上輩寺の世話人をしていた私の祖父より聞いた話で、祖父も相談にたずさわつた一人である。門の値段がいくらだつたか聞いておかなかつたのが残念だ。

中輩寺は明治六年(一七三三)神仏統廃令により、上輩寺の持寺ということになり、本尊日光菩薩、月光菩薩を上輩寺に移した。跡地は、ゆりかご園西方から原度器工場

の辺りであつた。下輩寺は中古廃寺となつたが、現在その跡地に薬師術という字はなく、字十二天の雷電社の東方がその跡地であるとされている。だがこの土地は、いちじるしく低く、雷電社やその先の長楽寺との段差が一間以上もあり、こんな低地に寺を建てるはずはない。おそらく天災により廃寺となつたものと思われる。なお下輩寺持であつたのか十二天社の十二神將は現在上輩寺に祀つてある。

3 長楽寺。酒匂五二二番地

浄土宗、勧学山修行院長楽寺。

「長楽寺」勧学山修行院と号す。同宗(矢作村春光院末)開山(残立、応永十五年(一四六)六月建)学蓮社本譽と号す、応永十五年卒。『新編相模風土記稿』

本尊は阿弥陀三尊。中尊は立像、長二尺一寸、安阿弥作。又地蔵を安ぜり(坐像、長一尺)。

長楽寺開基と思われる永代日牌を納めた石室を有する川瀬家の墓がある。この川瀬家は江戸時代酒匂川川会所の役人で

離を、建つたまま引越すことにした。しかし上輩寺の前で道が鉤の手に曲がっているため立ち往生、南蔵寺と上輩寺の住職、世話人が話し合いの上、山門を上輩寺で買い取ることになった。この山門は江戸中期(おそらく元禄大地震後と思う)の建物で、建築中に旅の工匠が通りかかり、手間賃稼ぎに手伝つて行つた。その工匠が左甚五郎だと言ひ伝えられていたが、真偽の程はとに角、見た目にはわからないが特殊な組立の門のようである。これは、上輩寺の世話人をしていた私の祖父より聞いた話で、祖父も相談にたずさわつた一人である。門の値段がいくらだつたか聞いておかなかつたのが残念だ。

中輩寺は明治六年(一七三三)神仏統廃令により、上輩寺の持寺ということになり、本尊日光菩薩、月光菩薩を上輩寺に移した。跡地は、ゆりかご園西方から原度器工場

の辺りであつた。下輩寺は中古廃寺となつたが、現在その跡地

に薬師術という字はなく、字十二天の雷電社の東方がその跡地であるとされている。だがこの土地は、いちじるしく低く、雷電社やその先の長楽寺との段差が一間以上もあり、こんな低地に寺を建てるはずはない。おそらく天災により廃寺となつたものと思われる。なお下輩寺持であつたのか十二天社の十二神將は現在上輩寺に祀つてある。

3 長楽寺。酒匂五二二番地

浄土宗、勧学山修行院長楽寺。

「長楽寺」勧学山修行院と号す。同宗(矢作村春光院末)開山(残立、応永十五年(一四六)六月建)学蓮社本譽と号す、応永十五年卒。『新編相模風土記稿』

本尊は阿弥陀三尊。中尊は立像、長二尺一寸、安阿弥作。又地蔵を安ぜり(坐像、長一尺)。

長楽寺開基と思われる永代日牌を納めた石室を有する川瀬家の墓がある。この川瀬家は江戸時代酒匂川川会所の役人で

離を、建つたまま引越すことにした。しかし上輩寺の前で道が鉤の手に曲がっているため立ち往生、南蔵寺と上輩寺の住職、世話人が話し合いの上、山門を上輩寺で買い取ることになった。この山門は江戸中期(おそらく元禄大地震後と思う)の建物で、建築中に旅の工匠が通りかかり、手間賃稼ぎに手伝つて行つた。その工匠が左甚五郎だと言ひ伝えられていたが、真偽の程はとに角、見た目にはわからないが特殊な組立の門のようである。これは、上輩寺の世話人をしていた私の祖父より聞いた話で、祖父も相談にたずさわつた一人である。門の値段がいくらだつたか聞いておかなかつたのが残念だ。

中輩寺は明治六年(一七三三)神仏統廃令により、上輩寺の持寺ということになり、本尊日光菩薩、月光菩薩を上輩寺に移した。跡地は、ゆりかご園西方から原度器工場

家号を「味噌屋」といい、味噌醸造をしており、川瀬度器工場も経営していた。江戸末期の当主庄右衛門は嘉永年中より寺子屋を開き、教育に熱心であった。

小田原地方の教育は、文政五年(二八三)大久保忠真が小田原藩校、集成館を建て、藩士の子弟を教育したとされているが、それより百五十年程前の元禄の頃より、寺の住職や名主が寺子屋を開き、人々を教えていた。

藩校では論語、大学、中庸等を教えていたが、寺子屋では、読み書き、算盤、躰を主体に、その地区に合った教育をしていた。筆者宅に当時の寺子屋の本が多数残存しているが、読み書きの往来ものの外に農業に関する広益国産考、養蚕書等も教えていた。

明治五年(二八七)七月、学制が公布され、各村に小学校が設立されることになった。明治五年八月二日、足柄上下郡で初めて酒匂村に学校が設けられ、長樂寺を仮校舎として「崇広館第二支校」が

発足し、小学校教育が始められた。これは、長樂寺の檀家總代川瀬庄右衛門が寺子屋の師匠をしていたためである。

翌明治六年十月、長樂寺仮校舎より川瀬庄右衛門宅を校舎に借用して移転した。記録によると明治七年(二八四)酒匂小学校は、教員男五名、生徒は男五十五名、女三十一名、合計八十六名であった。

明治十七年(二八四)字浜の台南に校舎が新築された。そして翌明治十八年、学制が変革され、尋常酒匂小学校と改称された。

明治二十五年(二九〇)小田原緑町に大火があり、酒匂村に飛火して小学校が全焼してしまったので、酒匂は長樂寺、小八幡は三宝寺を仮校舎に借用した。

明治二十六年七月、字浜の台に校舎を新築した。同年十月、神奈川県知事野健明の訓示で開校記念樹として楠苗五本を植えた。酒匂支所の二本と現在運動場の三本(内一本は枯死)がその記念樹である。

大正十二年(二九三)九月、

関東大震災で校舎は全焼、女教師杉坂訓導が焼死し、吉野、西山両訓導は重傷、火災は理科薬品室より起こり、御真影、勅語謄本、諸帳簿焼失。損害額四万二千五百円(『小田原、足柄の歴史』)。

隣の新築二棟八教室の校舎が建てられた。大正十三年十月新築二棟八教室の校舎が建てられた。長樂寺の事跡が、酒匂小学校小史のようになつてしまつたが、これも長

酒匂で記録に残っている寺子屋 一覧表

嘉永(二八四) 明治五年(二八七)	士	小関正豪	小田原藩士、三〇石、明治六年崇広館教員となる(酒匂小学校七十五年誌)
嘉永(二八四) 明治六年(二八七)	農	川瀬庄右 工門	酒匂川川会役人、明治六年自宅が崇広館第二支校となる
天保(二八〇)	農	川辺峯蔵	和算家、江戸愛宕山へ算額奉納(天野宏氏による)
天保(二八〇) 安政六年(二八五)	尼	妙恵	上輩寺に「男女筆子中」が立てた筆子塚あり
寛政(二七九) 文化八年(二八〇)	僧	日誠	妙蓮寺二十三世、筆子塚あり
宝永(二七四) 元文四年(二七五)	僧	日迨	法善寺十三世、男二〇人女三人の名を刻む筆子塚あり
明治(二八六) 明治三十六年(二九三)	僧	日透	法船寺四十四世、法弟子五人俗弟子八人の名を刻む筆子塚あり

記録に残らない師匠も多数いたようである。

(つづく)

中村原郷 の思い出

⑪ 遠藤治郎

紫蘇の葉組合

昭和二十四、五年二畝(二五)頃、飯泉の神尾食品の先代が遠縁の吉野さんに新しい品種、紫蘇の葉の栽培の話があつて、十数人の賛同者が出来た。その頃より一般の蔬菜の値が下がつて終戦頃程には売れない。組合組織を作る話を提案すると、同調して全員が吉野さんの家を集まって神尾食品の主人と話合つた。話では「ダルマ菜」と言つて皺のない大葉で揃え易く目方も多く収穫出来ること。従来より紫蘇の作付けをしていて、多くは玉葱の間作として四月下旬頃種を蒔き土をかけるので初穀で覆う。ほとんどは前川の漬物屋に出荷されていた。

紫 玉葱の作間の紫蘇の濃

玉葱の収穫の頃は五・六寸に伸びている。早目に玉葱を取り入れ、作間に堆肥を充分に入れ乾燥を防ぐ、湿気を好む作物で田園の近くの畑が適地である。最初は下の泥葉を二段は欠き落として、株間を五寸位にちどりに決めて次から約一週間位に一段二葉を摘んで八十枚位を一束に葉で結ぶ。葉の上の芽は「モミ」といつて加工用として菓子やなにかの用に使う。束ねた葉は千枚と言つてその日のうちに梅酢と塩で漬けて込んで梅巻や「木ト」巻に使う。朝四時頃起き出して朝霧が有るうちに摘み取る。み籠に摘んで大きな背負籠に入れてリヤカーで家に露があるうちに揃えると揃え易く能率が上がる。家族の人数に応じて摘み帰る。夕方四時頃には吉野さんがダイハツの三輪車で集荷に来る。落花生の麻袋に

入れて乾燥しないように心掛ける。露の外に水を打つと漬け上がりが悪いと言つていた。月に一度位神尾食品の主人と話し合いを持ち葉の軸の取り方が長いとか「モミ」枝の切り方等を話し合つた。お酒を二升位持つて来て飲みながら話が弾む。偶に吉野さんの三輪車に同乗して食品会社に行く。巡礼街道が八尺位の砂利道で国府津から飯泉迄は長い。先代が塩辛の試食をと言われて食べた糍で出来ていてあの味が今でも思い出される。

天変地異

昭和十年(二五)小生が曾我の地から下原に来た。五年目か、学校から帰つてお風呂を沸かして西空を見てあの山の向うに生家兄や弟や妹は今何をしているのかと暫く見ていた。すると急に黒い雲が、曾我山の上に湧き出して忽ちのうちに海を逆さにしたように波打つて丹沢山が見えなくなつた。急に大粒の電が降り出して五・六寸程積もつた。六月も半頃で煙草の

葉、桑、相模半白瓜、大麦、小麦玉葱と大被害を受けた。

翌日学校に行つたら三年生以上が落穂拾いに動員となつた。小竹方面が特に被害が大きく幾日も落穂拾いをした。また、この年は十月に大洪水が出て各所の橋が落ちて中井地方は特に被害が甚大でした。昭和の不況も未だ続く中で農家は大変で無尽講を立てる家が何軒もあつたと聞かされた。なお、沼代部洛の大火が有つて火が大敷に入つて一晩中竹の割れる音が下原の地に聞こえて翌朝竹の葉の灰が黒く積もつていた。早六十数年前のことになる。

無尽講

昭和の初年頃、不況が続いて、農家は肥料代の未払等で借金が溜まって部洛で三、四軒の家が無尽講を立てた。話では頼母子講とも言つて一人が百円を十カ年月掛けして三十戸単位位の購買が何カ月かその家に預けるそうで積立金がある程度溜まつた時期に、三十人

がその家に集まつて抽選会を行なう。最初当たつた人は掛金が割高に成る仕組みで、早く百円のお金を使う事が出来ても、後々の掛金に苦しんだと聞いた。親戚等に頼まれて三軒も四軒も頼母子講に入つて集金人が来ても払えない家も多くあつたと養父が語つてくれた。無尽講を立てた家は毎月三十人も集まつて酒肴で馳走する。費用が増大して再建が出来なかつたとも聞いた。

平成不況も早や八年以上も続いて事業に失敗して家屋敷を手離す話。自殺が年に二万人以上とか。一日も早く景気回復して老人が安心して暮らせる社会が望まれる。

川遊び

昭和十年(二五)の秋の大洪水で水車三軒が台地に家を移して二軒が電気車になつて営業を続けられた。部洛の人は、米、麦、粟等を楯きききを頼む。大洪水の前は多田家の水車の後を武井周治郎さんが営業して中村川に大きな堰を造つて堰で川

水が下原橋の下あたりまで淀んでいた。子供等の川遊びの良い場所であらう。直ぐ上は深さが二米以上もあって崖から飛び込んだりして、夕方遅くまで泳ぐ。大藪の下は昼でも薄暗い。

当時は裸足でフルチンと言つて皆が猿又は着用してないのが当たり前。

夕方早く帰らないとあの淵には河童がいて金玉を取られると大人達が言つていた。今は平成不況のせいか河童の話も聞かせてくれる老婆もいなくなつた。昔、国府祭に行つて見世物小屋に出て来た河童を見てから七十年近く過ぎた。宮沢賢治の河童伝説の有つた昔が懐かしい。

辨天様の蛇

福聚山禅龍寺は、明徳二年(元二)建長寺九十二世慶堂資善大和尚の開山。中村庄司平小太郎憲平が開基と聞く。昭和初年頃は間口四間奥行三間の小寺で無住寺であつた。昔、旅僧が住み付いた。檀家の人々も無住より安心と思つていた。そ

の僧が村から帰つて大門の急な坂に着いた時、黒と赤の大蛇が横に渡つて道を塞いだ。僧はこのことを村人に語つた。忽ち話が大きく広まつたと聞いた。禅龍寺沿革によると文化三年(八六〇)に弁才天を祀つたとある。石造りで蛇が蝮をまいた姿である。

禅龍寺の裏の畑に仕事に行つた時のことである。古材木の上の鋏の柄より太い黒と赤の蛇を見た。一瞬後退りした。蛇は腹を横に張つて私を見据えるかのように思えた。

平成九年に禅龍寺の建替への折りに千立方米の土砂を削り取つた故か蛇は住家を失つたのか？

その後、畑仕事を終えて何気なく再び其の場所に行つてみたが姿がない。弁天様の化身かとも思つたが、その後再び見る事がない。

触らぬ神に祟りなし

加藤家の氏神様が中村原字八幡森にある。ある日分家の加藤氏が八幡社の御神体を見せてやると言つて私を連れて行つた。

祠の扉を開き両手に持ち見せてくれた。立派な木彫の鎧甲の武士で七八寸程である。普通は小祭に白髭神社に部落の御嶽社の御霊代を迎える。

御神体は見てはならぬと決りに思つていた。ある日加藤氏は脳梗塞とかで倒れて十何年か寝付いて逝去されていた。また、遠藤家の義兄は、他宗派に信仰を変えられ、家神様の稲荷社をかた付けてしまつた。本家の義兄の身上に変わりがなければと思つていた矢先に真夜中に電話があり、義兄が心臓発作で逝去したと義姉から知らせがあつた。

半ば自失してしまつた。世間の人々が「触らぬ神に祟りなし」と言う事が現実起きて不思議な出来事とつくづく思つた。他にも似た話を聞くこともあり、有神論の真実を思う。早や四十数年前の出来事である。

正夢と逆さ夢

正夢と逆さ夢がこの世に有るような気がする。良く聞く話で赤子が生まれる夢を見ると死ぬ人が

出るとか。葬儀の夢を見ると赤子が生まれ、大蛇の夢を見ると大金が入るとか。

或る夜、眠れぬままに昔の初恋の女を思つていて。その女が小生が夢枕に出て座つていた。夢を見て目覚めた。気になつていたが、直接でなく下原の親戚で何か事が起つたと言つて電話が入つたと知らせが来た。不思議なこともあるものだと思つた。はや五十年前の思い出のことである。

思いが通ずるなんて。小生がソ連の収容所について音信がない。一年以上も過ぎてゐる。或る夜、兄が枕辺に現れて自分は南方で戦死したが治郎は必ず守つて帰国出来るようにすると言つて実父に安心するように言つた。

数日もしないうちに、佐世保から今帰国したと葉書が届いたぞうである。そんな話を実父がしてくれて世には不思議な出来事もあると信じるようになった。

野の獣の話

小田原市早川方面では

近年猿が増殖して農産物が全滅の状態だと戦友の青木さんが話してくれました。中には住居に侵入して冷蔵庫を開けて食物を持ち去るとも聞いた。その話を聞いて野菜は小生が作つて時期の物を譲つてやることにした。

ところで、中村原地方で食用の玉蜀黍を収穫時期になつて取りにいったら、全部何かの獣に取られたあと不思議に思い、近くの飼料用の玉蜀黍の食べ残した殻か作間に山積みになつてゐる。飼料用と食用と見分けて取る。或る集会の席で話をしたら小竹地方では二・三年も前からやられてゐる様子。近くの広濟寺の屋根裏に住み付いた白鼻心という獣だとも聞いた。また、果物が熟る頃を良く知つていて無住の家の枇杷が熟ると自分の家の屋根裏でことごと住み付いてゐる様子とも聞いた。之れ以上の猿や獣の被害がないように行政にもお願いを申し上げたい。

小田原提灯 ちょうちん その二

江戸民具街道 おもしろ体験博物館長(中井町)
(絵と文) 秋 沢 達 雄

ただ何となく眺め見るだけで懐提灯(ふところちょうちん)という呼び名がすくとんと納得できる、銅の打ち出しで仕上げられた鈍い輝きを発する天地の箱蓋の図一。

丈夫な和紙を固く燃つたこよりでしっかりと編み上げ、更に漆で塗り固めた、見るからに軽やかな図二。

その仕上がりの滑らかさや紙でできているとは思えないその見事な肌合いを掌で感じ取りたい衝動に駆られると申される方が意外に大勢おられるのです。懐提灯という名も無理なく理解

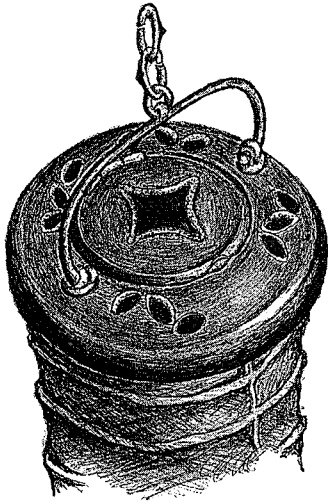
できると申せましょう。

九十四歳でなお健在である家内の母親の里で、道の拡幅で土蔵を取り壊さざるを得なくなつた。活用できる物を取りにい

らっしゃいとの一報に、小踊りしながら出掛けたのは十年ばかり前。五箇山入り口に当たる富山県は福光町の石崎家でした。箆筒長持(たんすながもち)つご

う七棹、手当たり次第に放り込み二度にわたって持ち帰り、わくわくしながら開いてみました。

文化文政期の木版本数百冊、文政八年に再々調査したと記録された五尺(一・五尺)の分銅



図一 幅11・5cm長さ32・0cm 取手高さ5・5cm 民具街道あかり第三室 江戸後期

(ふんど)時計、色鮮やかなランプ、中にまじって馬上提灯と一緒に出て参りましたが「こより」でできた小田原提灯であり、その懐に抱かれていたのが、図三の極小タンコロなのです。

手持ちには小さすぎますし、置くのも不安定で心許なく、

不思議に思ったものですから、早速問い合わせしてみました。

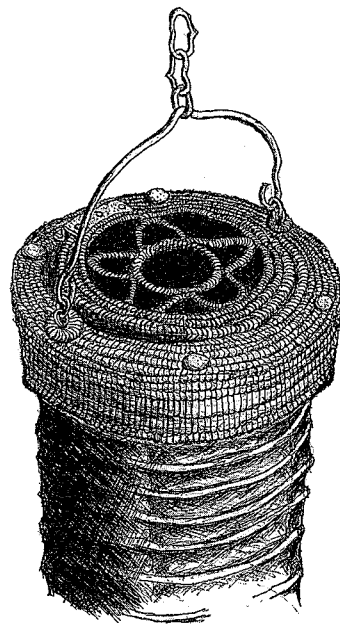
医者でありました先代の話では、「また更に医師であった先代からの引き継ぎもので、ちよこちよこ出掛けるには誠に重宝で、適当な重さがあつて提灯が安定したよ。和ロウソクを使つたら芯切りなど大変わずらわしかつたろうよ」と聞いていたと、建築家の現役を離れた当主の記憶の底から掻き出した話。

「追記」竹ヒゴも言われるところの角形であり、見るからに携帯用なのです。

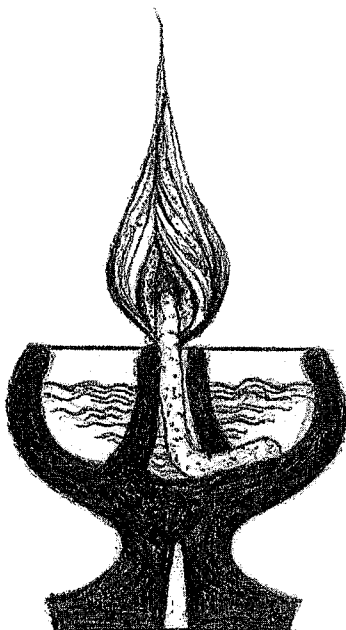
和ロウソクは芯が燃え残つてしままい、時々芯を切り取つてやらないと光が

半減し暗くなつてしまふのです。

和ロウソク専用と思われる燭台も、日頃は鉄輪に灯明皿(油蓋IIかわらけ)を乗せたり、タンコロなどが使われていたので



図二 幅13・0cm高さ28・0cm 取手の高さ7・5cm 民具街道あかり第三室 江戸後期



図三 原寸大幅4・3cm高さ3・7cm 民具街道あかり第一室 江戸後期

秋澤達雄さんにあかりの話を聞く

青木良一

五月の半ばの午後、小雨の中、誘われて中井町にある「江戸民具街道」を訪ねた。「ミュージアム・リレー」の一環で、ホールには四十人以上の人が集っていた。開始間際に駆け込んで、空いていた一番前に座る。このリレーは県西部の博物館・美術館を順に巡る企画という。

まず生命の星・地球博物館の青木館長さんの挨拶あり。行燈・油壺・蠟燭皿等を横に並べて、いよいよ秋澤さんのお話が始まる。題して「江戸のモノづくり」。

「ここにあるのは江戸期の、主として町場の生活の道具です。灯り、ろうそく、どれもたいへんメカニカルです。つかう者にとって心遣いがやさしい。皆さんにそういうことを分かっていただきたい」

切り出しのことばの中に、町場の民具であることが「江戸民具街道」というミュージアムの視点であると示唆される。そして、あとで話を振り返ってみると、この「メカニカル」と「心

遣い」の二点が柱になっていた。「なるほど」とうなずくような結論を始めに掲げる明快な話し方である。午前中に高校生の団体の訪問があったという。きつと熱心な応答があったのだろう。その余韻が残っているようである。

「分かっていただきたい」という想いが蠟燭の皿を手にとって言う。「明るさ、暗さを体験して頂きたい。手にとって体験して頂きたい」。あかりのない闇を体験してこそ一灯の光明が大きい。ここは明暗を体験できる場であることを強調される。

「これは油壺です。波返しが出ています」と話が続く。道具の名称は他に置き換えられない。文化が道具に名を付ける。この「波返し」もはまっている。

次いで、火打ち石・火切りガネで、蒲の穂につけ木で火をおこす動作をする。「正しい打ち方は」と言って銭形平次の女房になる。

油差しを取り出された。道具が手品の順番を待っていたようだ。「油は襟首にある穴(図のA)

に還っていきます。これには油溜まりがあります。日本人の触感、手業(てわざ)です。まさにその様は伸びやかな襟首である。「日本人の触感、手業(てわざ)です」と言うところでは、秋澤さんの世界にすっぽりである。

カネの手燭を手にして、「どうです。このようにどんなふうにしても垂直にろうそく(図のB)がなっています。機能的ですね」。道具が人を動かす。秋澤さんは手を捻り、身体を曲げる。

「こういう物は土間で朽ちたり錆びたりして、ほとんど残っていません」と、さりげなく「江戸民具街道」をPRされる。

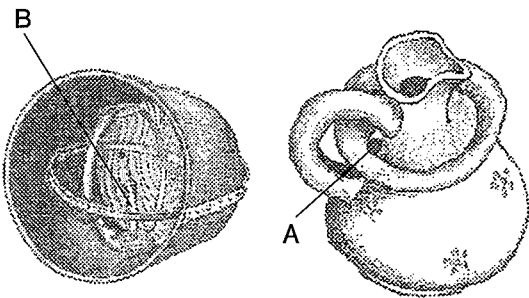
旅に出る人が使うような折りたたみの手燭も登場する。そして、「これは持っている人でも使え方が分からないのですが」と言ったあと、手妻使用のように、否、南京玉すだれよろしくこれを全身で広げ、また折る。繰り返したあと、「手燭であり燭台です。作ったのは田中久重(からくり儀右衛門)で、芝浦製作所のものごしらえの人です」。他に蠟燭が貴重だったことや蠟の材料の話もあり。聞き漏らした方が多い。

あかりの話は、「ここには、千五百点のうち半分くらいは灯りです」で終えて、ゼンマイ仕

掛けのからくり人形の実演と日本でただ一つ動く天文時計「正時版符天機」の解説に移る。

見て廻るだけではあかりの「メカニカル」と「心遣い」が分らない。秋澤さんのお話あつての「なるほど」である。それ程までに我々は、あかりの「メカニカル」と「心遣い」からかけ離れてしまった。

一つ忘れた。ここに「街道」と名が付いている意味を伺わなかった。人と人が行き交う場という意味なのか。ならばここは、まず秋澤達雄という人に行き交う場である。埃にまみれてじっとしていた民具たちを引っぱり出した人である。(おわり)



▲垂直になるろうそく(B) ▲還っていく穴(A)

愛宕山付近の絵図をみて①

石綿 勉

左の資料1の「新御蔵」建物八棟は、小田原藩の穀物貯蔵庫です。俗に「新蔵」といわれていた所で、小田原駅舎(資料3)の位置に相当します。

島居と建物二棟は「愛宕社」で、今は大稲荷神社に合祀されています。

この新蔵と愛宕社に「階段」が描かれてあり、共に小高い台地に位置していました。この台

地は、世に「あたごさん」とよばれていました。

「小田原駅西口広場の西側に接する標高30mほどの丘陵の南斜面である。かつて頂上には愛宕社がおかれていたことから、付近は愛宕山とよばれていた。『小田原城とその城下』

〔坂道〕

資料2に見える「土手の坂道」は、資料1「新御蔵」の坂道⑦と同じとみたまてました。写真の

原版(ネガ)を裏返すと、両者が重なり、同じ状況をみせて納得しました。

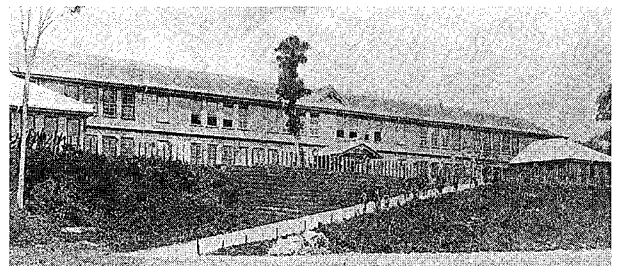
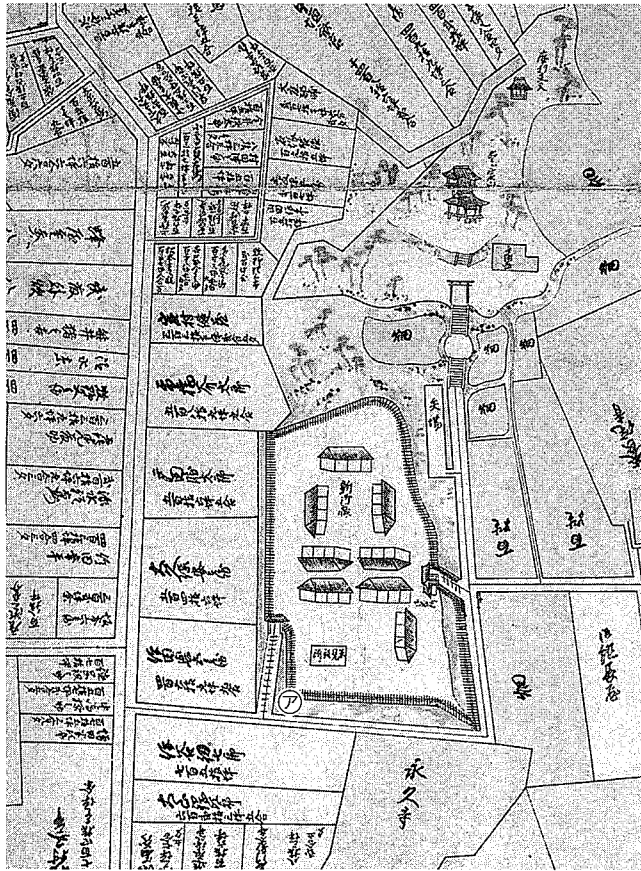
同じ坂道の見方になつと、県立二中時代の坂道は、城下町時代の米などを運ぶ運搬道であつたといえます。

搬入する農民は、この坂道に悩まされたことは十分に想像できます。後押し

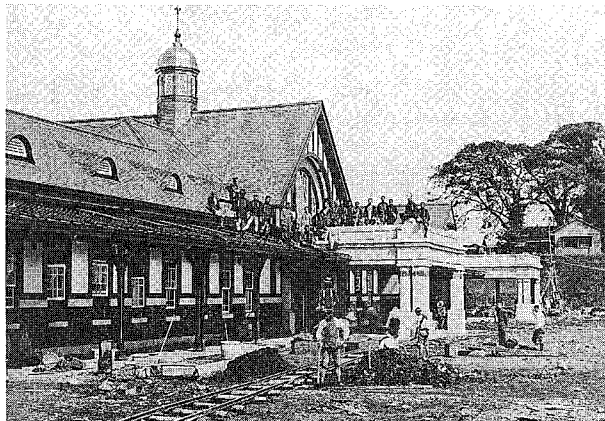
を必要とした坂道・汗をかく坂道だつたと思ひます。

写真は、県立二中に往来する人々をとらえています。城下町時代の産業道路が、明治末期・大正初期時代の通学路に転用されていきました。けれど、汗をかく様は同じ状態でした。

下の写真は、小田原駅舎建設時に、台地を削り取った跡を知らせて妙です。県立二中の跡地に、小田原駅建設は、台地



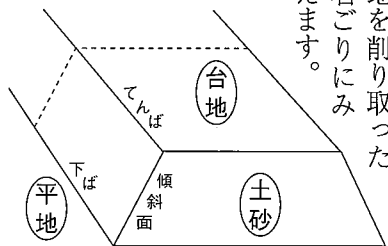
▲資料2. 県立第二中学校 「あの日この日」尾崎一雄著より



▲資料3. 完成間近い小田原駅舎 小野意雄氏所蔵

切り崩し・坂道消滅が前提とみました。写真右端の崖は、台地を削り取った名ごりにみえます。

台地の平地化工事



被写体の崖・トロッコ線・駅舎の三態は、トロッコを使って台地を周囲の平地並に土地改

▼資料4. 地形図(明治期)にみる小田原駅付近



良した小田原駅舎と解しました。平地並にすると坂道が解消されて、人々の往来や物の運搬が楽になります。(馬車や大八車など人馬で運搬していた時代でした)余計な労力を費やさないで済みます。

これがずっと続きます。後年にやり直さなくてもいいように、将来を見据えた駅舎の基盤づくりをしたと理解しました。安楽な平地にした熱海線建設理事者の、人に優しい坂道解消の土地改良工事とみました。

〈地形と土地利用〉

次の地図は、明治十六年測量の迅速測図「小田原」の一部分で、拡大したものを転載しました

た。①は小田原駅、②錦通り、③お堀端通りの位置と判断しました。

等高線や地図記号は、この地の明治期情報を発信している魅力的です。

①、小田原駅は、西部から東部にかけて緩やかに傾斜した小規模の台地が母体でした。この台地が削り取られて小田原駅が建設されて、西口・東口が設けられました。これは愛宕山の傾斜方向(北西―南東)に順応して、かつて存在した愛宕山の形見の西口・東口にみえます。

②、愛宕山の母体は箱根古期外輪山・明星ヶ岳で、この東方山麓の末端に舌状の地形で位置

しています。

山麓末端の三つ(A・B・C)の舌状の地形は、平地との接点となつて、先人をよびこみました。そして、南方の舌状(C)に小田原城を、隣の舌状(B)に小田原駅が営まれました。箱根山を占める絶好の地形と解しました。

小田原駅は、大雄山線・箱根登山線・小田急線をよびこみ、乗りかえ駅として多くの人を集散させ、親しまれてきました。

西湘地方の往来に、うってつけの小田原駅であり、まさしく要の位置・小田原駅です。

小田原駅設置に消滅した愛宕山末端は、西湘地方発展の礎となり、活性化をよびこむ玄関と

なつた風情です。いわば、地域を元気づけた小田原駅で、交通要地として蘇生した現代版愛宕山とみられています。

③、迅速測図の記号に、「桑畑・畑」があり、これが上記地図のAにみられます。

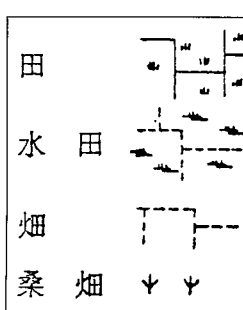
これによって、明治十六年当時のこの地(新蔵)は、桑畑が続く農地だったことがわかりました。資料1の「米蔵八棟」は既に無く、農地に転用されていました。

この地にやがて、県立第二中学校が建設されます。(明治三十年建築)米蔵と県立中学校の間に、桑畑時代があつたことを教えられた迅速測図でした。

したがって、米蔵・桑畑・県立中学校・小田原駅舎という土地利用となり、発展経路となります。

それぞれに共通し貫いているもの、地の利を思います。市街の近くに位置し、西湘地方往来の要となる地相を有する土地柄が魅力となつて、多様な土地利用に発展したと考えます。(続)

▼地図記号



(15) 第194号

私の青春 ⑫

続 京都練習飛行隊と終戦

菅沼 博

八月十六日の朝も昨日に続いて良い天気であった。

非常呼集に先立ち心もとない状況説明があつたが、その内容は、四国沖に敵機動艦隊がおり、敵の上陸は目前に迫っている。これを向かえ撃つ態勢を取らなければならぬ。ということであつた。

このため我々は分遣隊保有の小銃弾の全量を支給された。小銃弾を薬ごうに入れ、入りきれない弾薬は雑囊に入れた。

結果論であるが、我々は敗戦後には必要でなくなつた小銃・弾薬を持たされ、厄介払いをさせられたのである。

雑囊に入れられるだけの私物と着たきりの軍服で追い出されることは明白であつた。

分遣隊長は朝から顔を見せていない。隊付下士官が我々に命令していた。

雑囊に入る私物品の量はたかがしれていた。その上薬ごうに入らなかつた小銃弾は六十発もあつた。

私物の筆記具・洗面具・手拭・禪・じゅばん・袴下を入れれば

もう雑囊は一杯であつた。

何とか持てるだけ持とうと考へ、物入れにも煙草をしこたま詰め込んだ。

製材所の我々の営内には、一装用・二装用の軍服の他に諸々の私物・装具が残っていた。

未だこの時点では、再び戻つて来られるのだと思つたり、いや、来られないのではないかと、敗戦と敵迎撃とのどちらを信用してよいのか解らなかつた。

隊付下士官の号令の下に点呼を受け、トラックに乗りこんだ。

この時点で我々はすべてのことが理解出来たような気がした。残してきた軍服・寝具・私物類、そして分遣隊としての食料・機材等々は隊長の私有になるのだなということである。勿論、

分遣隊所属の幹部達の共謀があつたのであろう。

鞍馬山の山中から練習飛行隊までの道程は遠かつた。

トラックで原隊に到着したときの上官達の最初の声は冷たかつた。

「小銃及び帯剣を返納せよ」この命令により、我が身に残

された身の回り品は雑囊と水筒のみであつた。

「帰郷したい者は、隊事務室から俸給を受領し、帰郷してよし」このような内容の命令も出された。

我々分遣隊一同は、してやられたと憤慨して抗議する者もあつた。しかし、隊長も隊付下士官も原隊の中にはすでに見当たらなかつた。トラックはすでに鞍馬山に帰つたようであつた。

すでに我々の知らない内に戦後が始まつていた。即ち、我々少年兵の装具等を盗もうと計つた非常呼集であつた。

我々分遣隊員はしてやられたのである。

戦後に復員した兵隊達やその光景を目撃した人は、復員兵がどのような姿で復員したかを記憶している筈である。

内地の部隊で復員した兵隊は、どの兵隊であつても背中に重そうなりユック様な袋を背負つていた。

その中は彼が今まで軍隊の中で生活していた、身の回り品が入つていたはずである。

私が住んでいた町の筋向かいの家の予備少尉の彼は、一度家に帰り、又、部隊にとつて帰りを何回したであろうか、その度に、持ち切れない生活用品を持ち帰つた。

帰郷するとき持つて帰れる品物は、自分に貸与されている軍服・寝具類の毛布等の筈である。しかし、今我が身は演習用三装の擦り切れた夏軍服と、雑囊一個しか身の回りには無かつた。

鞍馬山まで歩いて行くにはあまりにも遠すぎた。しかも「俸給受領後は帰郷してよし」という命令は、あまりにも少年兵である我が身には嬉しすぎる内容であつた。

同期生の中には歩いて鞍馬山の分遣隊まで自分の軍服等を取りに戻つた者がいたということを知り聞いた。

結果はその翌日に判明した。無惨にも昨日まで軍律厳しく起居していた製造所の営内班は、もぬけの空であつたそうである。

あの軍規厳正な軍隊、そして陸軍将校として軍隊の中で、社会の中に君臨していた分遣隊長であつた陸軍大尉も、終戦の詔勅の一声に人間として最低の畜生に成り下がってしまった。

原隊の営内班といつても我々分遣隊員の寝る場所は無かつた。帰心矢の如し、早く私は故郷の父母の下へ帰りたいかつた。しかし、原隊に当初からいた同期生達は、身の回り品を背に櫛の歯を引くように、段々と居なくなつていった。

「俸給をもらつてきてやるぞー」

と誰かが言った。
我々は兵舎の廊下で車座になり、航空ウイスキーや航空糧食等で一杯やりながら氣勢をあげていた。この車座の十名位の者が印鑑を彼に手渡した。
彼は別棟になっている下士官室へ足早に行った。

我々分遣隊員気心の合った同期生の十名位は、身の回り品を鞍馬山から持って来られなかった事を、わいわいがやがやと話し合っていた。

一時間も過ぎただろうか、下士官室から連絡があった。

「分遣隊の飛行兵は、印鑑を下士官室に放置しておくな」

これを聞いた時、我々は「やられた」と叫んだ。

分遣隊長といい、しかも我が同期生の中にも同様の最低の人間があり、着たきり雀の我々に追いつけをかけた。

あの素早い奴は十名の四カ月分ばかりの俸給約五百円程を持って、自分の故郷へ向けて帰ってしまったに違いなかった。

我々分遣隊の飛行兵達は、手回り品といい、俸給といい皆上司と同僚に盗まれてしまった。

終戦から二三日過ぎただけにもかかわらず、あの終戦後のドサクサまぎれの風が吹き始めたのである。

その当時の社会に居合わせた

人でなければ、理解できない社会状態が始まっていた。

とにかく、手ぶらでは帰れないと私は思った。

帰郷用の荷物を作るのは明日の朝からにしようと考え残っている同期生達と夜遅くまで話し合っていた。

その夜も寝るには蒸し暑い夜であった。

朝、廊下でのゴロ寝から起きた私は、朝飯を食べたのか、食べなかつたのかは覚えていない。

確か岐阜出身の同期生である畑佐上等兵と語らって原隊にいた時に起居していた三角兵舎に行くことにした。

「明日は帰郷用の米を支給する」という下士官室からの連絡があった。しかし、彼、畑佐飛行兵も帰りたい一心のようであった。

彼と私は私鉄線路を越えた向こう側にある三角兵舎に向かった。三角兵舎の中は足の踏み場もないほど雑然として、これが明野から転属してきた時に過ごした営内班なのか信じられなかった。

営内班の中は何も残っていないかった。私の私物品も三十糶四方位の箱の中に保管されている筈であった。

この中には、日誌、写真、帳面、手紙類等が入っていて日常には必要なものばかりが保管さ

れていた。

全部ぶちまけられ、中身は何もなかった。ただただ呆然として畑佐飛行兵と顔を見合わせ兵舎内を眺め回した。

三角兵舎の補給庫の扉の鍵は開いていた。中には毛布・カーテン生地と体操服が若干盗られないで残っていた。

私は毛布三枚・カーテン生地三枚と体操服三着を毛布に包み肩にした。

畑佐飛行兵は毛布を多く持ち帰ろうと、何枚かを包み肩にしていた。しかし、あまりにも重かったのか、私鉄駅で電車に乗る時、駅前の家に立ち寄り、一枚進呈してきたようであった。

すべての社会生活が昭和二十八年八月十五日の正午を境として狂ってしまった。したがって、正常な精神で社会生活しようとするのは人間失格であり、生きて行くのは非常に困難となり始めていた。

終戦は世の中がびっくりかえるような一大事件には違いなかったが、ノロマな私は雑囊一つと小銃弾六十発、そして毛布若干枚を持って、着のみ着のま一人しよう然として敗残兵のように故郷に帰った。

練習飛行隊の三角兵舎から畑佐飛行兵と共に私鉄に乗り、京都駅へと向かったのであるが、

我々の復員は終戦後三〜四日しか過ぎていなかったため、電車賃・汽車賃は駅の切符売り場でちゃんと支払った。

当時の復員者で汽車賃を支払って帰郷した者はいない筈である。

上等兵になって俸給は貯金ばかりだと書いたが、これが本場に役に立った。

普段は現金の使い道があまり無いため、持っていなかったが、貯金を下げて帰郷の旅費に当てた。

忘れてしまったが、当時でも京都から小田原まで二円や三円では列車に乗れない筈である。

京都からの列車は混雑していたが、静岡止まりのため駅のホームで一夜を過ごし、翌朝の一番列車で小田原まで帰郷した。少年時代の多感な、しかも純な気持を持っていた私に人間不信の念を抱かせた事柄は、一大ショックであった。

盗みを働いた彼等は今何をしているだろうか、半世紀過ぎた今でも、今の幸せな社会の中でどんな生活を送っているのだろうか、フト思うことがある。

戦後半世紀が過ぎた今、思い出として笑い話で過ごしてしまふ内容であるかもしれないが、現代では許せない行為であったことは確かである。(つづく)

露国・日露の役俘虜のこと(29)

八十七年ぶりのお礼 後編(19)

内田善作記
吉田雪子編 「日露戦役従軍記録書簡往来」

後記

ソ連邦消滅、EC発足に
想うこと

この項を書き終えた頃、ソ連邦は消えた。その改革の先頭にたったゴルバチョフも大波の中に没した。

レニーンが導いた共産社会主義国家も七十年の案外短い歴史の中から消えていった。その意義・原因等は今現在識者達が躁がしく論じている。ここでは触れぬ。

唯、革命が終り、新しい制度が成立した後が大変だ。このことは、ここ二、三十年来のアフリカの、近東、南アジア諸国の革命後の動き、混乱の様を見れば分かる。

それは主に民族問題だ。同族、民族が個としてある程度認められた時、過去の怨念を含めて衆となり塊って自由を、その集の利益確保にかりたてていく。

故・隠岐威重

これは大変なことだ。白人の軛を脱したアフリカの部族の対立、抗争の姿が。インドシナ半島の、フランス、アメリカの去つた後の血と血で争う民族間の戦い。もう少し沈んだ姿であるが多数の異民族を抱く中国の、漢人の異民族に対する気の使い方等がある。また、すぐ隣国の朝鮮半島では、今現在南北民の対立は明らかなものだが、それは唯、南北民の主義をいただいた対立だけではない。大昔の、高句麗・百済・新羅、北方騎馬族(ツングース系)と南方系渡来族の半島に移り住んだ人達の数百年前の政争・抗争が深く根を下ろして現在に至っている。

今度のソ連邦の消滅劇、それに伴つての各地方の民族、その集団の国々の独立。その国々の中にも異民族多数が抱かれて内部で流血の抗争があると聞く。また、資源の、地質を含めての経済的アンバランスがあり問

題をより複雑にする。

いやもつと厄介なことには宗教的対立だ。これはキリスト教(ロシア正教)をいただくロシア系民族とマホメットの教えをいただくアラブ系の間にも、これも、数百年間の、いやもつと千年も昔の放牧文化の時代からの罅(ひま)りが横たわっているのだ。腕を組んで考え込んでしまふ。

今回のソ連邦の消滅は、自由主義経済と共産主義の官僚的独裁経済の争いの結果とも聞く。それでこの勝負の結果、今すぐ(数年後に)⊗側は自由経済に移り万々歳の道をたどるが如く東側の指導者は唱え、また、それを支援する西側のトップの人達も、自国の利益も含めて、その様にあらんことを願つて樂觀的な言を弄しているが、さて、この激動の余震はそう簡単にはおさまるまい。

個人のエゴ、その積上げの、グループの、民族のエゴが続く。決して側面から見れば好ましいことではないが。だが、それが往き着き何か不具合が生れるまで決して気がつかぬものだ。いや、押せ押せの勢が決して衰えぬ運動だ。運動なのだ。

そして、その争いが血を流し、なぐり、なぐられ、遂に国と国、また国連のあつまる大集団の戦い、即ち大戦に。世に云う世界

戦争と云うことか。

今から見れば太平洋戦争など可愛い大戦だった。自国(日本)の主張・利益追求のみを隣国に押しつけていき、他民族のヒンシュク、反抗を買った。だが、世界の何を何も知らぬ馬鹿な指導者のリードに乗り、何も言わず、まるで禅問答の如き他には不理解な題目を唱え、その理不尽を行為で示し自爆、解り易く云えば、腹切り、覚悟で滅亡に突入していったのだ。

たしかに、戦いの規程としては大戦だったが底に横たわる根は単純なもの、自国のエゴのみに押付け、その間に少しのネゴセイションの影も認められぬ。だが世はそんなに狭くない。宣伝、宣伝、自分に損なことを少しも言わず、少しでも利になればとワイワイ躁ぎまくるのが世相らしい。

今度の米大統領の訪日などそのいい例だ。なり振りかまらず己の当選のみを願う姿、よく選挙違反にならぬものだ。またそれを裏から支えた某国の首相も同罪のそしりはまぬかれなからう。だが、二回の世界大戦争、その戦場の中心地の欧州では、その痛さに懲りて、やっと、もうあんな愚行は繰返すまいと、人間の叡知を込めて新ECの統合に発足したが…。

が、未だカオスの真ただ中の東欧ではそれが落ち着き、新たな秩序が出来上がるまでは十年の単位か、下手をすると世紀の位を必要とするように思えてならぬ。なにせ、個の、集団の本能に触れる問題だから始末が悪い。

短舌愚言以上終り。

筆者注(一) 文中(第一八四号14ページ4段16行)にある村上正光大佐。当時歩兵第二十八連隊長。奉天会戦時に、奉天郊外の森林中で露軍の重包囲に落ちいり、隊は殆ど全滅に頻し残兵隊長以下俘虜となる。だが戦後大佐の捕えられたことは殆ど咎められず、逆に戦功を認められ勲章をもらったとか。

よく戦ったか否かの本質について評価している。表面上の囚われたことにこだわっていない。サッサと逃げれば俘虜にはなるまい。それより敢闘、戦線維持を保ち、後、囚われたことを評価している。明治の人の気分がよく表に出ていて嬉しい。

筆者注(二)

吉田雪子女史

内田家(屋号おきな屋)から吉田家に嫁す。夫君は旧海軍(平塚火薬廠)・防衛庁にわたり火薬を研究された防衛技官と聞く。

(完)

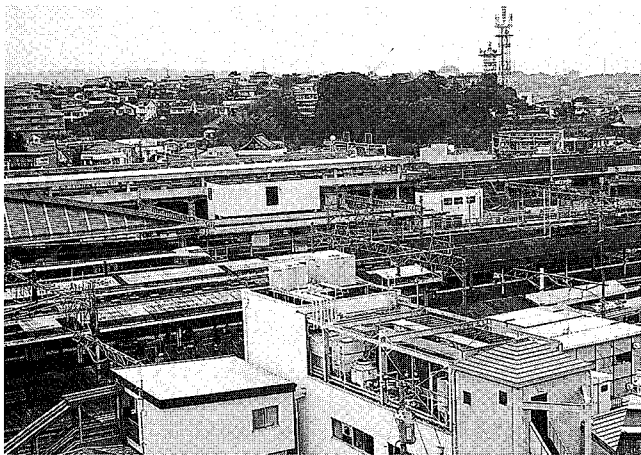
一句鑑賞

夏の灯をこぼして夜汽車橋の上 高田 掬泉

一読して夏の夜汽車が鉄橋の上を、がたんごとん走る光景が目に見えるようである。大きな河であろうか、汽車の灯りが河面にちらちら映る様子が、灯をこぼしてと表現したところがこの句のお手柄である。今は鉄道を走るのは電車だが、俳句の上ではやはり汽車の方が言葉に響きがあった。いい。夜汽車という何となくロマンを感じさせる言葉が、懐しさと情緒をただよわせて、生前旅の好きだった作者の心が蘇ってくるような思いにさせられた。

(劔持芳枝)

▼小田原駅と谷津丘陵



▼山王川浚渫工事(井細田大橋の下流)

流水量の変貌を知ると、この工事が納得できます。普段は、写真のように少ない流れです。これが大雨が降り続くと、川幅一杯の橋桁すれすれの大水の流れとなります。かつては、橋桁に流木等がひっかかって流れをさえぎることもありました。すると、流れは両側に溢れて、冠水の被害をうけます。この被害防止がねらいと思い、安心した市民生活を願う工事と理解して、写真におさめました。



訃報

乾 民氏

小田原市城山二一一一

平成十三年八月三日(逝去)

享年七十一歳

斉藤 法氏

小田原市本町一―五―二八

平成十四年八月七日(逝去)

享年八十一歳

謹んでお悔やみ申し上げます。

人名にちなむ旧町名保存碑(二)

澤地英

(6) 安斉町安斉小路

東海道筋の横町九町の
一つ(十王町、鍋町、宮小
路、新道、野沢横町、市場
横町、雁木町、安斉町、南
横町)。位置としては東海
道筋の欄干橋町と筋違橋
町との境を南へ下ったと
ころに安斉町があり、そ
れをさらに下ると安斉小
路になる。西に右折する
と西海子小路となる。安
斉町の保存碑は、朝倉風
呂設備前の路上で、茶畑
町の道にぶつかっている。
保存碑によると「町
名の由来は町内に小田原
北条氏の侍医田村安斉
(栖)があつたためとい
われている。この町は欄
干橋町と筋違橋町の境
を、東海道から南に折れ
安斉小路に至るまでの横
町を云う。」と記されてい
る。平成二年三月の設置
である。

安斉小路の保存碑はさ
らに下った本町一―一三
杉山工務店前の路上に

あつた。筋向いに右京と
いう四季料理店がある。
保存碑によると「この地
名は地内に小田原北条氏
の侍医田村安斉(栖)宅が
あつたためといわれている。
小田原北条四代の氏
政と弟氏照は、豊臣秀吉
の小田原攻めに敗れたあ
と、この家で自害させら
れたと伝えられている。」
と記されている。同じく
平成二年三月に設置され
ている。

陸奥国田村郷(宮城県)
から起こる坂上氏族が、
鎌倉期から南北朝にかけ
て活躍した。(姓氏家系戦
国期には医師田村宗仙が
早雲に仕えているが、同
氏は丹波康頼の後裔で、
代々医道の家として知ら
れ、京都に居住して千本
典薬と号したが、宗仙は
坂上姓田村氏から出て同
家の医業を継いだものと
いう。(寛政重修諸家譜)以
降子長栄、孫長仙と北条
氏に仕えている。なお三

代に亘って号を安栖軒
(安斉軒)と称した。又江
戸期の小田原城下町武家
屋敷町安斉小路の地名
は、かつて田村安斉が居
住していたことに由来す
る。(相模風土記稿)子孫の
川崎市宮前区梶谷の田村
義和家は、江戸期以来の
文書を伝えている。

氏政氏照の切腹の場所
を田村邸にしたことは、
如何に信頼されていたか
の説明になろう。「鈴木家
譜」によると、仙台初代
の氏次は善衛門入道安清
といい、氏次の道号安清
は小田原安斉町の語源で
もある。当時北条氏家の
侍医田村安栖に私淑した
と思われる。この氏次の
医師としての道号は、氏
直と督姫を思い出す心の
よすがとして名乗ったと
いえるかも知れない。市
井の医家が名乗るとする
と当時医官として幕府極
官的地位にあつた者の名
では重過ぎる感がある
う。それを敢えて名乗つ
たところに、小田原にひ
かれた強い心情があつた
と思われる」と記している。

(7) 狩野殿小路

小田原城南西部に当

り、筋違橋町、山角町を
南下する数条の小路で、
東から数えて安斉小路、
狩野殿小路、諸白小路、
天神小路、御厩小路と
なっている。いづれも小
田原北条家臣でも中級ク
ラスの武家屋敷となつて
いる。保存碑は、現在一
号国道を以前の湘和会堂
とセブンイレブンの間を
入ると、五〇米先に南町
一―四五古橋産婦人科医
院前の路上にある。保存
碑によると「地名の由来
についてはこの小路に絵師
の狩野古法眼が住んでい
たとも、又小田原北条氏
の家臣狩野氏宅があつた
とも伝承されてきた。江
戸時代この一帯は中級の
藩士が住んでいた。なお
この地は狩野小路とも金
殿(かなどの)小路とも書
かれた。」と記されてい
る。平成三年三月の設置
である。

伊豆国田方郡狩野荘か
ら起こる藤原南家伊東氏
流の氏がある。(姓氏家系)
平安末期伊東一族が狩野
郷を開発立荘し、荘名に
ちなんで名乗った。なお
源平合戦時多くの狩野姓
が軍記物に見える。小田

原北条氏麾下には、伊豆
狩野や中郡妻田(厚木市)
などに七七一貫余文を知
行。松山衆の狩野介がお
り、松山衆には伊豆田方
郡などに七〇貫余文を知
行した狩野藤八。武蔵吉
見郷岩殿(埼玉県)に九貫
余文を知行した狩野左近
の名も見える。(所領役
帳)又馬廻衆に狩野大膳
亮泰光があり、西郡飯田
内(小田原市)に八〇貫文、
三浦和田(三浦市)四一貫
文、西郡府川(小田原市)一
七貫文、中郡長谷(厚木
市)に一九〇貫文などの
買得地を合せて五一三貫
余文を領している。(所領
役帳)

泰光はのち飛騨守を称
する評定衆の一人で小田
原北条氏初期の多くの裁
許印判状を署判してい
る。武蔵滝山城に入った
氏照の重臣として、とも
に入城した狩野一庵は、
のち氏照の家老として活
躍する。一庵は宗円と号
するが、実は大膳亮泰光
と同一人物であろうと推
定され、天正一八年の秀
吉軍による八王子城攻め
で戦死している。
江戸期の小田原城下の

武家町に狩野殿小路があつたが、且つて小田原北条氏家臣狩野氏の屋敷があつたことにちなむという。(相模風土記稿)狩野介は栢山衆として、大膳亮は馬廻衆に名がある。(小田原旧記)なお奉行人一覧によると、小田原本城関係としては、狩野又四郎が弘治三年七月に、狩野弥太郎が永祿二年一月に、狩野大膳亮が弘治三年一月に夫々就任している。

一方小田原狩野派には狩野玉楽といい、恐らく中心的存在の絵師ではなかつたろうか。小田原に來遊したのは永祿の頃と思われるが、玉楽の活躍で領国文化に様々の影響が現われ、氏政氏照が北条一門の中で、絵に志した人であると伝えられている。雲舟に関係の深い雪村周継が、天文一八年小田原に來遊し、早雲寺の開山以宗清画像を描いている。早雲は京都出身で、領国文化につよい関心を示したとはいえ、絵に関しては史実は影がうすく、保存碑にある前者の絵師と、後者の評定衆

とでは、後者に妥当性がつよいように思われる。何となれば地理的にみても、この一帯は武家屋敷のたぐずまいが濃厚と思われるからである。

とくに評定衆署判者として後北条氏の裁許印判状四八通のうち、山角康定が一五通であり、狩野泰光が八通とともに段突であり、評定衆の双璧といえるのではないだろうか。山角町との比較から狩野小路を後者の狩野氏と認めるのが妥当ではなからうか。

(8) 山角町

東海道筋の通り町九町の一つ(高梨町の項で前述した)位置としては現在一号国道の西端に当り南町四一―一九佐々木木工所前の路上にある。保存碑によると「小田原北条氏の家臣山角定吉の屋敷があつたので、この町名がついたといわれる。町内には小田原北条時代から豊職人、屋根職人の頭などが住んでいたといわれる。東海道筋を西から御厩小路、天神小路(いづれも武家屋敷が並ぶ)が南に延びていた。」と記され

ている。昭和六三年三月設置されている。

藤原南家工藤氏族の山角氏があり、足柄下郡山角町(小田原市)或いは山城国(京都府)山角より起こるともいう。(姓氏家系)

足柄下郡山角町の町名は小田原北条氏の家臣山角氏の屋敷があつたことに由来するといふ。(相模風土記稿)山角氏は二階堂維遠の後胤といひ、山角町を由来するという伝えでは、はじめ山城国宇治郡大導寺村に住んで、大導寺を称し、のち定澄が早雲に仕え、小田原城下篠原に住み、同所は山の角にあたるるところから山角と呼ばれ、のち山角を家号にしたといふ。(寛政重修諸家譜)

小田原北条氏の摩下には、早雲のときにすでに仕えていた山角某があり、伊東市と並んで伊豆代官に登用されている。永祿年間には馬廻衆として中郡北矢名(秦野市)などに二〇〇貫五〇〇文を知行。山角四郎左衛門は一宮(寒川町)に一〇貫文を知行。山角四郎右衛門は西郡幸福寺分に四〇貫

文を知行。山角弥太郎は東郡富堀に木曾分(横浜市)六一貫四二四文を知行した山角刑部左衛門らがあった。(所領役帳)

四郎左衛門は山角康定とみられ、のち上野介、又評定衆となり現在知られる北条氏の裁許印判代四八通のうち彼の審判したものが一五通ある。刑部左衛門は定勝といひ、のち紀伊守となつた。山角は役帳でみる限り貫高は少ないが、一族で奏者、奉行を努めた者が六人おり小田原北条の重臣であつた。又氏康の一字書出しをうけたものが三人もいる。(平塚市忠江戸期の旗本山角氏では、定澄を初代とし、三代定吉以降小田原北条氏に仕え、定吉の二男定次の子定吉は、天正一九年に家康に仕えて都筑郡などに一五〇〇石を知行し、その孫定勝の二男勝直は、延宝四年父の遺領のうち大住郡に二〇〇石を分知された。三代定吉の三男定勝は寛文一年に三崎奉行となり、定勝の四男正勝は兄政定を継いで天正一九年家康に仕え、定勝の

知行所にある大住郡酒井村(厚木市)に三〇〇石を分知された。寛永一〇年同郡下津古久村長沼村(以上厚木市)などで三〇〇石を増された。定勝の二男盛繁も小田原北条から家康に仕え、定勝の知行所のうち酒井五〇〇石を分知された。子の直昌が酒井村、長沼村と同郡八幡村(平塚市)に五〇〇石を継いだ。定勝の三男長定は、酒井村に二〇〇石を分知された。寛永一〇年生沢村(大磯町)に二〇〇石を増された。(寛政譜、県史別編一)二十将衆の中に山角四郎左衛門尉の名がある。(小田原旧記)前述の奉行六人を祥記すると、奉行人一覧により小田原本城関係として、山角刑部左衛門尉は永祿四年七月から天正一四年九月まで、山角上野介は天正六年九月から天正一四年七月まで、山角紀伊守は天正七年二月から天正一八年二月まで、山角弥三は天正一四年三月に、山角孫十郎は天正一五年九月から天正一七年九月まで、山角治部大輔は天正七年一二月

から天正一八年四月まで、夫々就任している。評定衆で審判した者の裁許印判状をみると、山角康定が一五通と圧倒しており、その内容を見ると、如何に厳正公平に貫かれた名判決であることがわかる。一族で奉行を努めた者が六人も輩出したことは特筆されるべき

であろう。前述したとおり所領役帳でみる限り、貫高は少なかったにも係らず、敗戦後も実力実績を買われ江戸時代に入っても仕官として認められ、そのみか子に孫に至るまで知行をうけているのは、逸材であったといえるのではないだろうか。

(9) 結び
町名として残る程の優秀であり、人望の厚かった山角氏ほか六名は、姓氏家系によると、中には先祖が天下の梟雄北条早雲の夢にあこがれ、小田原へ集ってきたともいわれている。そしてその子孫が逸材となり活躍してきた。不幸にも戦争とな

り、相手方の圧倒的経済力が、物量作戦を伴い、予期せぬ敗戦となった後北条家。そして折角の逸材が埋もれてしまったことは遺憾である。三百年五代に亘る実績をもちながら、小田原城総構大外郭が夢幻となった。総力戦、近代戦において見劣りがして負け続

け、他の逸材が後北条家を見放して離反していった中で、最後まで節を枉げず、踏留まって戦った事実は、町名として後世まで残したことを誇りに思つてよいのではないだろうか。もつと旧町名に愛着をもつて欲しいと願わずにはいられない。(完)

片岡日記 ②7

片岡永左衛門

施主 瀬戸 勇夫
福興大国神讚祀會
會長 子爵五辻治伸

大正十四年五月

十五日 雨

福興大国神祭典ナルニ、大雨。然レ共、参拜人群集ス。此社ハ、先年城山続キナル御料林ノ一部ヲ拂下、遊園地ノ計画ナリシニ、震災ニテ目的ノ外レタルニ、其地内ニ數園ナル老樟アリシニ、如何ナル動機ニテカ、持主瀬戸鶴吉ノ其樟ノ立木ニ、大黒天ノ彫刻ヲ發起シ、降神式之祭典ニテ、案内書ハ左之通り。
豫て相州小田原町旧城址ニ建立中ニ、有之候

大国主神の御尊像ハ、樹齡凡千五百年の巨木を立木其俣、高サ一丈一尺五寸ニ彫像至し候ものにて、之を福興大国神と称へ奉り、其仮殿宇も漸く落成致し候ニ、就テハ、来る五月十五日の吉祥を選び、午後十二時三十分降神式執行仕り付、御参拝被下度、此度御案内申上候。尚引続キ十五、十六、十七の三日間春季大祭を執行殊ニ十五、十六日ハ新潟市持有之神代太コ神樂を奉納仕候。

福興大国神

十六日 曇

福興大国神参拝多く為ニ、時ならぬ來客有り。

十七日 雨

今日も大国神二門前賑ふ。横濱より小供来り五時帰る。

十八日 半雨

大国様雨の為に、今日も日延。

十九日 晴

預金者委員會ノ件にて、清水専吉氏を往訪せしニ、未だ帰宅せずむなしく帰る。

福興大国神

廿日 晴

清水氏尋ニ、面會打合なし。銀行に立寄り帰宅。

廿一日 半晴

午後より銀行ニ出勤し、夕刻帰宅。今晚増補シタ相中雜誌製本出来テ、心持モ軽クナツタ。

廿二日 晴

久々の快晴で龍夫と史跡踏査ニ出掛た。初夏ノ郊外ハ又格別だ。久野の神山辺ハ久野堰の改修工事ノ大工が多ク立働り居

廿三日 晴

久野堰の疏水式で、花火の音が早朝よりする。

廿五日 晴

午前九時発にて、本店ニ行、七時帰宅。龍夫午後より帰京。震災以来中止した當地の時の鐘も、本日より前六時十二時后六時の三回撞き始した。足掛三年目は飛行機の有る時

代としてハ緩慢だ。

廿六日 晴
午前出勤、淳子午后帰省。

廿七日 雨
甚た寒く袷を着した。豊岡附近震災に同情し、町長は慰問として金千円を持参し、昨夜出発した。

廿八日 半雨
井上侯か骨董品を売卜聞しが、先代世外侯ハ甚しキ蒐集欲テ、位置と権勢をも利用したと聞けバ、止不得場合暗に涙吞て奪した者も有口ウ。斯クシテ集メても死テ幾度も立又ニ、二代目は売テ仕舞西河原之石た。草葉之陰テトンナ顔シテ居ルカ。

廿九日 半晴
藤沢に行、三時帰宅。

三十日 晴

三十一日 晴
曾我重ノ病氣を見舞、野崎廣太氏を別荘に往訪。氏日ク昨夜山田幸三當地寺院ノ墓地を合併し、共同墓地新設ノ来談アリシガ、拙者當地ニ来訪の最

初ニ繁栄来トシテハ寺院ノ移転ヲ必用ヲ感タノデ

其意見ヲ談し、此計画ハ現町當局者ノ如キ慘憺タル震災ノ復興ニ際し、工事の上前ヲ取り、其他不正ヲナスノ風評者テハ、成功六ヶ敷い。人格信任アル片岡君が、最も適任だ。拙者よりも内話すると云たが、今日ノ面会ハ幸なり。是非にとの事て有タガ固辞、迷惑ノ旨答たが、町長ノ風評ハ事実ハ兎も角、小乗を奔する性行もあれハ、火氣無キ煙りも非る辺し。困たもの。親友として甚た心苦ルし。

大正十四年六月

一日 半雨

旧城内の老松も震災被害此頃現れ来り、枯木数本見ゆ。惜しき事なり。

二日 曇

今日當警察署新築地鎮祭。

三日 曇

支店ニ立寄。十時発にて本店ニ行。一時半再び乗車し、大森徳富氏ニ秋草数種を持参し、四時親一

方に着す。

四日 曇

龍夫と銀座松坂屋新店ニ買物し、午後帝国大学史料編纂掛ニ相田学士を往訪、貸与し置キタル北条時代ノ地図に二脱就テ説明・応答セシニ、小田原築城考、城門考、并師長国府考ノ三編を史学雑誌ニ発表ヲ促し、猶片岡文書明治小田原誌増補、相中雜誌ハ史料編纂掛にて謄写保存を応諾也。追て貸与ヲ約し、親一方に帰宅す。

五日 雨

午後高輪南町の竹田宮邸ニ行き、刺を通し應接所にて宮家仕人二面會當宮大妃殿下の先年は御用邸に度々の御成ニ際し、小田原町の教育を御奨勵被下しハ、一同難有存知居りしも、時の推移ハ、何物も消滅せしめ、知ずく忘却をもと虞り、坂正臣先生に揮毫を願ひ置しに、最早二十余年にもなりしも、小田原町にも御高恩を慕者も有る事を折に触れ御上聞に入度、然れ共、古く御奉仕の人

の有無も知らざれば、若し一時の作り事にかと思

津宮の版画ニ正臣先生の詞書せし軸を出せしに被見せられ、貴殿には未だ御面會を不仕も高輪御殿(高輪御殿ハ両内親王の御帰嫁以前の常の御殿にて大正十二年の震災に消失す)以来は拙者一人己にて今日折悪く殿下ハ北白川様へ御出になり、事務官も不在なれば、御帰邸の上で御意志を無漏可ニ申上、長き奉仕の者も少けれバ古き御縁故の皆様も失礼するも難斗きも、御上京の折々は御遠慮無御参邸をとの挨拶にて、御菓子二種ヲ被下丁寧の取扱いて、北白川様にハ高輪御殿より之田辺正之助氏未た在任の由を承り、辞して隣接の北白川宮邸に至り、田辺氏に刺と通せしに、早速出て来り

久々の挨拶有り、

応接間にて拙者より竹田宮同様の事を申述しに、同氏も相悦び、幸に竹田様も御来邸なれば、軸は御台覧にとなれば、元より素志に非るも、貴意に任すべし、と申て持去られ、暫

くして當家も謄写し置との旨にて、雨中なれども

御庭の拝観を御被付、御庭に出れば芝生にヒマラヤミミタを配し品川沖も見渡す雨景に見蕩しに硝子障子の明き竹田北白川の両妃内親王殿下ハ侍女と御縁に御出座有りたれば陛下に拝謁せしに、御會釋を賜りたり。両宮殿下の御在世ならばと、両妃殿下の思召を恐察すれば、我心にも五月雨の思あり

降らぬだに露けきものを

内のみこ
た、す
居ます宮居庭の五月雨御前を退り、應接所にて御菓子二種を被下、其上に酒肴料として金拾円を賜りしも、是には甚だ恐縮なりしも辞しも得ず、厚く御礼を田辺氏に願ひ、宮を辞したり。
先日徳富蘇峯先生と談話の折、不斗先年鎌倉にて、頼朝の講演に親ヲ知ルハ子ヲ観るを要すと知りしか両大妃殿下の、教育を御奨勵有りしハ、町民の未だ忘却せざる処にて、必ず先帝の御血統之故な

る可く、然共も、人の運命は貴賤に不拘而殿下の御他界を付度すれば、御清がすがしき日も少なかる遍く、假令何分間にて

も、御慰安申度ハ我々の至情にて、其御慰安には古き御仁恵も忘却せざる

と、折に触れて御聴に達し度と申せしに、先生も大賛成にてあの宮様は先日の講演にも御台臨有り、よき宮様にて貴君の意志も至極相応しき御慰安なり、と在りしが、其時は軸を持ち居しも、

急ニ帰宅の必要生じ、今回の上京ニ初志を達した。親一方に帰り、御菓子

子を佛前に供へ、御酒肴料は何かの記念にもと、嫁に預けしに、親一も拙者の在京中るればと、特に早く帰宅し、一同思召を悦び、御菓子を頂戴し

す。

六日 晴

藤沢に立寄、五時半帰宅。

七日 晴

午前田辺氏ニ上海事件之見舞に午后は小田原藩史編纂の委員会ニ出席ニ出

席。

床しさの何処にあれと橋の薫れる里の夏の朝風

八日 晴

昨日小田原有信會十三年度會報受取タカ、内々藩史編纂委員會報告に、名譽委員片岡永左衛門氏は、多年丹精ノ結晶トモ謂フヘキ、自作ノ片岡文書ヲ提供セラレタルハ、本事業遂行上裨益スルトコ口頗ル多大ナリ、茲ニ感謝ノ意ヲ表ス

ト記載アルカ、文書ノ自作ニハ驚た。

午后より宮ノ下支店に行き、帰れば田辺勉吉氏先年より中風にかゝりしに、俄に昨夜病死の知らせあり。悔に行き、十時半帰る。

十日 晴

紀行文震災にて、汚穢甚しき文補筆成る。

十一日 晴

十二日 晴

田辺氏遺骨東京に立出を藤沢迄送り、本店に立寄しに三橋氏来り昨日興信銀行に竹藤専務往訪セシニ、関東銀行整理之件、日本銀行大蔵省之暗諾を得て一先安心せり、との談話有りしと聞き、居合たる銀行同人も喜色有り、五時半帰宅。

紀行文今夜式冊ニ自製し心の跡と名命

上冊の表紙に

水のあや山の姿も

さまゝくに

心の跡をのこすこのふみ

下冊に

春は花秋の紅葉に折々の

心の跡も思ふみつつき

十三日 晴

本店に行、五時帰る。

十四日 晴

親一名古屋より帰途立寄。淳子と湯河原に行き、

帰途立寄三時半発にて帰京。

十五日 晴雨

例の腹痛にて在宿。

十六日 晴

十七日 晴

十八日 晴

十九日 雨

廿日 雨

藤沢二行、時々大雨

廿一日 今日も時々雨

廿二日 晴

出勤、二時帰宅

廿三日

往年伊藤博文公熱海入湯中ニ揮毫ノ「南湖ノ七絶」ヲ所藏セシニ、震災に焼失し今ハナシ。然ニ大橋乙羽著「千山萬水」に其詩ヲ記載し有レハ、其表紙ニかく

本書四拾頁、南湖の詩は公の惠贈なりしに、震災に焼失しけれハ其面影を所藏す。

思ひ出るたひに聞きて

虫の声

ふるき紅葉の仰きおも

はる

廿四日 晴

藤沢二行き午后帰宅。

廿五日 晴

午後龍夫東京より来る。

廿六日 雨

今朝目覚れば龍夫手ヲ伸シ熟睡す。其ノ寝顔ヲ熟視するも祖父の情か、龍夫ト蓮上院ニ行く。閑談暫く、帰途関氏新宅ニ寄る。

廿七日 晴

行用にて二三氏往訪

廿九日 晴

八時発にて横濱ニ至り諸重役ト井阪氏ニ會見、九時帰宅。

三十日 晴

銀行ニ立寄、九時発にて藤沢に立寄。横濱高田氏病氣見舞ニ行く。病人思の外よく止宿す。

(つづく)



第2回史跡めぐり実施報告

- 日時 6月10日(火) くもり
- 日程 小田原駅前(8:00)ー無量光寺ー三増合戦古戦場ー荻野山中藩陣屋跡ー星谷寺ー相模国分寺跡ー浜田歴史公園ー小田原駅前着(16:50)
- 会費 4,000円 ○参加者 37名(氏名略)



▲三増合戦古戦場跡

北條氏と武田氏が対峙した古戦場跡ですが、愛川町の郷土史家中村正一さん(後列右から二人目)から親切な説明をうけて、好評でした。

▼荻野山中藩陣屋跡



▲無量光寺

時宗大本山で本尊は一遍上人。歴代上人の墓や、南国産「ナギ」の大樹、芭蕉の句碑などを見学、難読な句を皆さんで解読しました。
「世にさかる
花にも年仏まうしけり」

▶相模国分寺跡

海老名市立郷土資料館の方から、分かりやすい説明をお聞きしました。小田原の千代とのかかわりを思うひとときでした。



第1回史跡めぐり実施報告

“小田原市内
(市街地東)を巡検”
ー小田原大秘録との
かわりー

- 日時 平成15年5月15日(休) 雨天決行
- 日程 小田原駅前(8:40)ー北条氏政・氏照の墓ー牟屋町(御幸座)ー請願寺ー七枚橋ー蓮上院(住職の話)ー三乗寺跡ー宗福寺ー江戸口見付跡(新宿公民館・昼食)ー近江屋敷跡ーなりわい交流館ー石川漆器解散(14:00)
- 講師 鳥居泰一郎氏(副会長)
- 参加者 22名(氏名略)

講演会報告

江戸時代の小田原地方の酒

開成町文化財保存委員長

瀬戸崎 雄氏

酒ではなく、梅酒の梅や奈良漬で酔う人がいます。運転すると酔っぱらい運転となります。

酒とは、アルコール1%以上の飲料で、酔っぱらう水です。

酒類は、清酒、合成清酒、焼酎、みりん、ビール、果実酒類、ウキススキー類、スピリッツ類、リキュール類、雑酒の十種類に分類されています。(酒税法)

清酒とは何か。米と米麴と水とを合わせて発酵させて、漉したものです。

国によって、酒の原材料は違っています。その国の農産物の中で、安価で大量に入手できる物で、酒を造っています。

世界の酒の原材料

その国の農産物の中で、安価・豊富で容易に入手出来る物。

- ドイツ：大麦：ビール
- フランス：葡萄：ワイン・ブランデー
- イギリス：大麦：スコッチウキスキー
- ロシア・北欧：馬鈴薯・各種の麦：ウオッカ
- アメリカ：とうもろこし：バーボンウキスキー

中国：小麦ともち米：紹興酒。高粱：白酒

西インド諸島ほか：さとうきび：ラム

メキシコ：龍舌蘭：テキーラ

日本：酒・焼酎・みりん

酒の製造を知らない民族

(イ) 北極圏のイヌイット：耕地がない。

(ロ) ニューギニアの高地人：食物の貯蔵をしない、発酵容器がない。

○文献にみる日本の酒の最初

へ中国の文献からみた日本の酒について話されましたが、略します。

●日本書紀「汝可以衆菓釀酒八甕(いましあまたのこのみを以つて酒やはらをかめ)須佐之男命が八岐大蛇を退治する時に飲ました酒です。

●小田原の最初の酒

北条印判状。天正十八年二瓦

○、「一人足一人」熱海白井所

■「葎山ノ江川前より大樽受取、則小田原迄持参、上下二日の扶持銭被下也、仍如件。一追て、

小田原より樽□□□遣候、以上」北条氏が籠城に備えた名酒で

す。江川太郎左衛門の所で作り酒で、秀吉の醍醐の花見に取り寄せた天下の名酒です。小田原に出てくる最初の酒ですが、小田原で作った酒ではありません。

小田原で作った酒は、「永代日記」に出てくる酒です。「柴田や四郎兵衛酒能作り候に付……」が最初の記録です。

小田原地方の酒

幕府は酒造りを免許制度にしました。明和三年(一六六五)酒造株を創設して、酒造株の所有者だけに酒を造らせました。

小田原藩

の酒造行政は、幕府の布告通りに執行することとはなかつたようです。兼業酒屋の酒造停止に、小田原藩では農村部の農民に酒造免許を交付しています。

金井島の酒造りは、

幕府の基本政策である都市型酒造業の育成が、小田原では定着せず、城下外の農村部に酒造りを頼らざるをえませんでした。池上や中島は丹沢水系だるう。だからいい酒ができるんで

▼足柄上下酒造高上位10人 (○印は現在の開成町)

順位	村名	酒造人名	酒造高	順位	村名	酒造人名	酒造高
1	池上	権左衛門	600.000	6	○牛島	糸右衛門	225.000
2	○金井島	弥五右衛門	510.000	7	和田河原	清左衛門	195.000
3	○金井島	矢五兵衛	345.000	8	○吉田島	源四郎	186.000
4	松田惣領	伝蔵	255.000	9	○吉田島	紋兵衛	180.000
5	上曾我	和七	240.000	10	川村山北	常左衛門	180.000

小田原藩の酒造り地として、早くから開発されました。天明八年(一七八六)酒造株改めの時には、小田原領最大の酒造地に発展しました。小田原町内の酒造りは、一軒も記されていません。

酒造りに、水や気温・技術の良さがないと、優秀な酒ができません。

小田原城下の水は、酒造りに不向きでした。

良い酒を造るには、醗酵を促進させる水があることが最高の条件です。金井島や吉田島、牛島などは、この水が得られて銘醸地になっていきました。

小田原藩の酒造行政は、あくまでも大名領小田原藩としての独立自治の維持、特に独立した経済圏の維持に、必要な諸行政の一環として取り扱われたようです。藩は独立国体制でしたので、財政の自立が行政の要でした。

酒を藩の外から求められると、藩の貨幣がその分流出して、経済基盤が弱体します。独立国の経営から、酒の自給自足を強力に進める必要がありました。

幕府の基本政策である都市型酒造業の育成が、小田原では定着せず、城下外の農村部に酒造りを頼らざるをえませんでした。池上や中島は丹沢水系だるう。だからいい酒ができるんで

平成15年度

総 会 報 告

小田原史談会

- 日 時 平成15年4月26日13時30分
- 場 所 小田原市立図書館
- 総会次第 略
- 講演会 講師 瀬戸崎雄氏
★「江戸時代小田原地方の酒について」

平成14年度事業報告

- 1 総 会 4月27日(土)小田原市立図書館 11月7日(木)～8日(金)
講演会 「小田原北条氏の伝えたもの」 中山道・木曾路方面 参加者20名
「明治小田原太平記を読んで」 2月8日(土)高麗郷・越生方面
講 師 石井 啓文氏 参加者38名
- 2 研修事業
5月15日(木)久野方面 講師高橋佐年氏 参加者42名
6月11日(木)平塚・茅ヶ崎・藤沢方面 参加者50名
9月21日(土)さきたま風土記の丘方面 参加者38名
- 3 会報「小田原史談」編集発行事業 190号～193号発行
- 4 総集編 第3巻・第4巻の販売
- 5 その他
会員名簿発行
役員会・選考委員会開催
曾我傘焼き祭、北条氏政・氏照公墓前祭、久野古墳慰霊祭 役員参加

す。この辺りが箱根水系との接点ではなかるうか。新玉の自噴をみて、丹沢水系と箱根水系、海の水系、三水系のぶつかりありを考えます。

※約二時間の講演内容を精選しました。系統的な内容が断片的となり、欠落や解釈のずれなどの不手際を心配します。その箇所のご容赦をこう次第です。

(文責・石綿 勉)

支出の部

項 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減	摘 要
総 会 費	50,000-	47,587-	▼2,413-	
会 議 費	130,000-	134,892-	4,892-	編集委員会
連 絡 費	20,000-	21,259-	1,259-	
会報発送費	100,000-	80,400-	▼19,600-	
交 際 費	45,000-	43,150-	▼1,850-	
慶 弔 費	40,000-	0-	▼40,000-	
事務用消耗品	24,000-	15,311-	▼8,689-	編集委員事務費含む
振込手数料	5,000-	1,340-	▼3,660-	
名宛ラベル	50,000-	23,562-	▼26,438-	
研修委員会費	
会報印刷費	1470,000-	1,480,500-	10,500-	
会員名簿印刷	60,000-	52,500-	▼7,500-	
積 立 金	100,000-	100,000-	0-	10月積立
予 備 費	86,975-	0-	▼86,975-	
会 計	2,180,975-	2,000,501-	▼180,474-	

平成14年度一般会計決算報告 (中間)

収入の部

15. 3. 31

項 目	本年度予算額	本年度決算額	増 減	摘 要
前年度繰越	299,975-	299,976-	1-	編集委員会 残金含
預り金	0-	9,000-	9,000-	前納会費*
会 費	1,200,000-	1,197,000-	▼3,000-	399名*
賛助会費	680,000-	570,000-	▼110,000-	
預金利子他	1,000-	30,005-	29,005-	利息 5-
合 計	2,180,975-	2,105,981-	▼74,994-	

寄付金 石井啓文、加藤千代子氏より

*前納会費内訳

平成15年度分	山口県 磯部 箱根 天野 東京 奥村 荻窪 府川	平成15年度分 ～16年度分	兵庫県 沼田
---------	--------------------------------	-------------------	-----------

上記の通り一般会計決算報告をします。残額105,480円は平成15年度の会計予算に繰り入れます。平成15年4月1日 会計委員 鳥居泰一郎

会計監査の結果、研修委員会会計、特別会計共に帳簿の処理、領収書など適切に処理されていたことを報告します。

平成15年4月1日 監事 佐久間俊治 印 監事 鶴井道泰 印

平成15年度一般会計予算

15. 4. 26

収入の部

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	摘要
前年度繰越	105,480-	299,975-	▼194,495	
預り金	0-	0-	0-	前納会費*
会費	1,200,000-	1,200,000-	0-	400名*
賛助会費	570,000-	680,000-	▼110,000-	
預金利子他	1,000-	1,000-	0-	利息等
合計	1,876,480-	2,180,975-	▼304,495-	

支出の部

項目	本年度予算額	前年度予算額	増減	摘要
総会費	49,000-	50,000-	▼1,000-	
会議費	110,000-	130,000-	▼20,000-	
連絡費	25,000-	20,000-	5,000-	
会報発送費	80,000-	100,000-	▼20,000-	
交際費	45,000-	45,000-	0-	
慶弔費	20,000-	40,000-	▼20,000-	
事務用消耗品	14,000-	24,000-	▼10,000-	
振込手数料	2,000-	5,000-	▼3,000-	
名宛ラベル	25,000-	50,000-	▼25,000-	
研修委員会費	10,000-	0-	10,000-	
語り部の会費	20,000-	20,000-	新規
編集委員会費	20,000-	20,000-	新規
会報印刷費	1,320,000-	1,470,000-	▼150,000-	
会員名簿印刷	55,000-	60,000-	▼5,000-	
積立金	50,000-	100,000-	▼50,000-	10月積立予定
予備費	31,480-	86,975-	▼55,495-	
合計	1,876,480-	2,180,975-	▼304,495-	

*機関紙『小田原史談』4回発行 各号を32頁とする。

*前納会費内訳

平成15年度分	箱根 天野 東京 奥村 荻窪 府川	平成15年度分 ~16年度分	兵庫県 沼田
	山口県 磯部		

第4号議案

役員候補者

	氏名
会長	小野 意雄
副会長	鳥居泰一郎
副会長	勝俣淳一郎
副会長	石綿 勉
総務	植田 博之
副総務	石井 啓文
会計	武田 敏治

会計監査	氏名
(2名)	佐久間俊治
	鶴井 道泰

理事 (若干名)	氏名 (五十音順)			
	青木 良一	小栗 良英	田中 豊	向山 重忠
	天野 宏	剣持 公一	高田千代子	柳川 辰夫
	安藤 繁美	剣持 芳枝	高橋 佐年	湯川 玲子
	石井 艶子	小林 房子	中野 家孝	吉池 清
	石黒 栄治	田口 鏡子	早川 初枝	

平成14年度 総集編・積立金・特別会計報告

区分	収入額	支出額	摘要
前年度繰越金	391,180-		
本会計から	100,000-		定期預金
総集編 No 3	36,200-		
総集編 No 4	57,750-		
普通預金利子	4-		
合計	585,134-	0-	

合計額の明細
 普通預金 ￥385,134-
 定期預金 ￥100,000-
 ※ ￥100,000- (平成15年度)

総集編の内訳
 No 3 期首在庫 140部
 販売 20部
 期末在庫 120部
 No 4 期首在庫 296部
 販売 25部
 期末在庫 271部

期末在庫の明細
 (No 3) (No 4)
 岡部先生 15 7
 武田敏治 86 4
 アオキ画廊 12 3
 伊勢治書店 3 3
 八小堂書店 2 2
 平井書店 2 2
 アルファ 0 250
 120部 271部
 担当 武田敏治

平成14年度 史跡めぐり会計報告

月日	方面	収入(円)	支出(円)
5/16	前年度繰越金	518,841	
	久野 方面		42,175
6/12	平塚~藤沢方面	207,000	199,466
9/22	さきたま風土記の丘方面	190,000	208,024
11/7~8	木曾路方面	537,600	557,015
2/9	高麗郷方面	195,000	189,730
	利息	28	
	合計	1,648,469	1,196,410

残額452,059円来年度に繰越します。

担当 勝俣淳一郎

平成15年度事業計画

1. 会報委員会活動

「会報 小田原史談」は、例年通り年4回発行します。頁数については、予算との兼ね合い上から、各号32頁建てを原則とします。なお、今まで「会報」の編集・発行に当たる委員会の呼称を「編集委員会」として来ましたが、「研修委員会」との関係から呼称が紛らわしいという意見がありますので、「会報委員会」と呼称を改めて設置したいと思います。

2. 研修委員会活動

史跡めぐりや講演会等の活動は、従前通り「研修委員会」を設置して実施します。

(1)小田原市内の巡検は：5月15日(木) 栄町・浜町方面 / 講師：鳥居泰一郎氏

(2)日帰りの史跡めぐり

①. 近郊/バス利用：6月10日(火) 海老名・厚木方面

(無量光寺、三増合戦古戦場、荻野山中藩陣屋跡、星谷寺、相模国分寺跡ほか)

②. 遠出/バス利用：9月27日(土) 足利方面(足利学校、ばん阿寺、佐野薬師)

(3)一泊バス旅行：11月6～7日(木・金)：奈良、今井町、飛鳥路方面

(薬師寺、平城京址、秋篠寺、西大寺、唐招提寺)(高松塚古墳ほか)

(4)初詣：東京方面(根津神社、谷中霊園、下谷七福神)

(5)講演会：総会時をふくめ、年2回開催の予定です。

3. 語り部の会活動

語り部の会は、新たに設置する委員会です。まちの人々から、地域の風習や伝承、子どもの頃のまちの様子などをお聞きしながら、写真等の資料も収集し、座談会や展示会等の機会を設けて、小田原の記憶と特色の発掘・再発見と、子どもたちに伝える活動をしたいと思います。そして、この活動の一つの発表の場が、小田原市民文化祭50周年記念事業の一場面になればと思います。

4. 創立50周年記念事業準備会

來来年の平成17(2005)年度は、昭和30(1955)年に創立の小田原史談会は、創立50周年を迎えることとなります。その記念事業を検討・準備する専門委員会を立ち上げたいと思います。

5. その他の事業

このほか、昨年度までに話題になった事柄について、検討・調査・研究等の機会を持ちたいと思います。

6. 総務関連事項

(1)新会員の加入を計るとともに、「会員名簿」を10月に発行する予定です。

(2)「おだわら市民活動サポートセンター」に登録し、施設使用の便益を受けようと思います。

(3)小田原市が行う業務について、参入の機会を得られるように、小田原市市民活動推進条例に係る登録をしたいと思います。

(4)その他、地区委員と連携を計り、会の活動を深みのあるものにして行きます。 以上

第3回 史跡めぐりご案内 足利学校方面へ

期 日 9月27日(土) 8時出発 雨天決行

集合場所 小田原駅前(東口)

主な見学地 佐野薬師、足利学校、
ばんな寺、太平記館

小田原駅着 午後6時40分頃の予定

会 費 6,000円(含昼食代)

受 付 9月9日(火) 午後2時より

伊豆箱根トラベル小田原営業所

ハガキは出しませんのでお忘れなくご参加ください。

係 勝俣 34-3939

関連報告1

名誉会長ならびに顧問委嘱予定者

	役職歴	氏名	備考	
名誉会長	元会長	富田 千春	第9代会長	(1994~1997)
	元会長	岡部 忠夫	第10代会長	(1998~1999)
	前会長	山口 一夫	第11代会長	(2000~2002)
顧問	前副会長	曾我 保夫	副会長就任期間 (1982~2002)	
	前理事	山口 貢	創立(1955)翌年からの 最古参会員	

関連報告2

副会長のほかの事業分掌ならびに各理事の担当事業委員会活動等については、第1回役員会の審議を踏まえ、第3回役員会での互選にもとづき委嘱します。なお、地区委員についても第3回役員会で委嘱します。

14年度事業報告・会計報告と15年度計画並に新役員について、満場一致で可決されました。

